

平成25年度 咸宜園教育研究センター特別展(秋季企画展)

九州の私塾と教育

～咸宜園とその周辺～



咸宜園圖

壬午一月寫



懷舊樓



大松樹

東西南

三塾

在可家

生陸

多餘友

都得一

括督

望政、

規約、

十二則

每月

廿七舖

日部譯

講堂

長春亦稱
秋風亦稱
東家亦稱
先生本宅

夜雨寮

いあいさつ

今回の特別展は、「九州の私塾と教育（咸宜園とその周辺）」をテーマとしました。

私塾は江戸時代における高等教育機関の一つで、学問塾とも呼ばれていました。咸宜園が誕生した江戸時代後期は、「教育爆発の時代」とも呼称されるほど、私塾（学問塾）だけでなく、藩校や寺子屋（手習塾）など多くの教育機関が全国各地に開かれた時代でもありました。

江戸時代の日本の教育は、官公立の教育機関であった幕府の「昌平坂学問所」や諸藩の経営する「藩校」や「郷校」などがあり、主に幕府家臣の子弟や各藩の藩士教育のための学校でした。一方、私的な教育機関の発達は九州では大分県が最も古く、天正元年（一五七三）に寺子屋「戴星堂」（豊後高田市）が開かれます。私塾の誕生はその例に遅れること約八〇年後の慶安年間（一六四八―一六五一）に長崎で開設した「輔仁堂」が九州では最も早い開塾だったとされています。

九州各地では、一八世紀後半頃から北部九州を中心として私塾が創設され、明治五年の学制発布前後までに開かれた数は約六四〇件に及んでいます。都市部だけでなく、農村部にも私塾や寺子屋が開設され、庶民の教育熱の高さを証明しています。また、咸宜園に代表されるように近代教育にも通ずる特色を持った私塾の存在は近代日本を支えた逸材を数多く育てました。

江戸時代から明治初期までに開塾した全国の私塾数は、現在までに約三五〇〇件が確認されていますが、その中で九州の私塾数は全国の私塾全体における約五分の一を占めています。幕末維新期の九州に多くの私塾が生まれた背景には咸宜園の門下生たちによる教育の普及に邁進する活動の様子が見えてきます。九州の教育発展における儒学者廣瀬淡窓と咸宜園の果たした役割は大きく、今回の展示は咸宜園とその周辺に広がる九州の私塾について紹介します。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、公益財団法人廣瀬資料館や咸宜園門下生の御子孫、その他多くの皆様に御協力をお願いしました。貴重な資料の御出陳を快諾いただきました関係者の皆様に感謝の意を表します。

平成二五年季秋

咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗 俊

目次

ごあいさつ 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊	1
はじめに 江戸時代の教育機関	2
江戸時代の教育と教育機関・私塾（学問塾）の誕生	3
日本の私塾分布図	4
日本の私塾一覧表	5
九州の儒学者と廣瀬淡窓の咸宜園	6
九州の儒学者	8
コラム「豊後の三賢」	9
私塾「咸宜園」・咸宜園の教育・咸宜園の門下生	10
儒学者の系譜	11
第二章	12
九州の私塾と咸宜園教育の広がり	13
九州の私塾の始まり・咸宜園教育の広がり	14
九州の主な私塾分布図	15
恒遠醒窓と「蔵春園」	16
村上佛山と「水哉園」	18
咸宜園門下生が開いた九州の私塾	20
修文館・鳳鳴書院・鳴滝塾	21
淡窓の交流関係（九州儒学者とのネットワーク）	24
廣瀬淡窓人物相関図	26
第三章	37
出品資料目録・解説	37
主な参考文献	37

凡例

- 一 本書は、平成二十五年十一月一日（金）～十二月十五日（日）まで、咸宜園教育研究センターで開催する特別展「九州の私塾と教育・咸宜園とその周辺」の展示解説書です。
- 二 本展の企画及び本書の執筆・編集は主に吉田博嗣が行い、溝田直己が補佐した。なお、第一章の儒学者の系譜は深町浩一郎（研究員）が作成した。
- 三 出品作品の写真等は、所有者及び資料所在地等の関係機関より借出し、その他の写真は長谷川正美（雅企画）と溝田直己が撮影した。
- 四 出品作品の写真は、巻末の出品目録・解説にすべて掲載した。本文中の図版には、出品作品の写真（一部）及びその他の写真を掲載した。
- 五 下記の各位・機関の協力を得た。記して謝意を表します。
 公益財団法人廣瀬資料館、公益財団法人亀陽文庫能古博物館、行橋市教育委員会、求菩提資料館、大分県立先哲史料館、日出町教育委員会、長崎市、シーボルト記念館、多久市郷土資料館、唐澤博物館、水戸市教育委員会、足利市教育委員会、備前市教育委員会、うきは市教育委員会、光善寺、廣瀬貞雄、原田俊隆、廣瀬洋一、園田大、恒遠俊輔、村上良春、城戸淳一、帆足雅晴、賀来敏、鈴木理恵、吉田洋一、武田耕一、大野雅之、織田毅、石井茉衣、重岡由美、志佐喜栄、木屋陽子、松尾幹彦（順不同・敬称略）



はじめに 江戸時代の教育機関



足利学校



弘道館



咸宜園



閑谷学校

江戸時代の教育は、近世日本の文化史上、最も豊かな文化的活動の一つである。寺子屋を始め、私塾・郷学・藩校など私立から官公立の学校に至るまで多様な学びの文化があった。「寛政異学の禁」では朱子学以外の学問を禁じたことで、幕府の昌平坂学問所や藩校などは正学（朱子学）を中心とする教学となったが、私塾では自由で開放的な教育が実践され、漢学だけでなく国学や洋学といった特色ある塾が台頭していくことになる。

江戸時代の教育と教育機関

江戸時代の日本は世界有数の教育先進国であった。識字率の高さだけでなく、自由で開放的な教育が全国各地で展開されていった。幕末の日本を訪問したドイツ人のアレクサンダー・フォン・シーボルトや考古学者のシュリーマンなど多くの外国人が日本の教育の特徴を今日に伝えている。

江戸時代の教育が発達する以前では、戦国時代の教育施設として足利学校の存在は重要である。足利学校では儒学のみが講じられたことに特色があり、フランススコ・ザビエルやルイス・フロイスに高く評価されている。幕藩体制の国家形成後は、特に儒学が取り入れられ、將軍吉宗の享保の改革が画期となった。初めて幕府として儒学教育（朱子学）の導入を積極的に推進したのである。この施策の本質は武士に限らず全ての民衆に対する儒学の振興・普及の策であったとされている。また、社会的階層を超えて教育が普及した背景には出版技術の発達があると言われている。一七世紀に出現した書肆（出版商）の存在が大きく、最初、京都で興り、大坂、江戸にも広がった結果、教育の普及に大きく貢献した。このような出版活動は、さらなる文字社会の普及を促し、教育の普及・向上の基盤を形成していった。

次に、江戸時代の教育を実践した教育機関を概観する。大別すると官公立と個人経営の私立（私

学）に分かれるが、施設の類型では概ね幕府の官立学校、そして藩校、郷校（郷学）、寺子屋（手習塾）、私塾（学問塾）の五つに分類することができる。幕府の学校としては湯島の昌平坂学問所が著名であるが、直参だけでなく諸藩の子弟も学ぶことができた。藩校は藩の主に家臣の子弟を教育する目的で設立した学校で、寛永一八年（一六四一）に創設された備前岡山の花島教場が始まりであるとされている。全国各地に開設された藩校の数は、改称や合併されるなど再編されたものを含めると明治初期までに七五〇校が存在した。代表的な例では現存する水戸の「弘道館」などがある。また郷学は郷校とも呼ばれ、藩の経営や民間有志による設立、そのほか町村共同体による経営など様々な例があり、民間立であっても公的保護を受けている例があった。郷校で最も古い開設例は備前の「閑谷学校」である。寛文十年（一六七〇）に岡山藩主池田光政が創設した。設立の目的は、儒学教育（仁政思想）に基づく政治の安定化を目指し、地方の農民指導者の教化であったとされる。

一方、私学の興りは七世紀に遡る例もあるが、ここでは近世的性格の寺子屋や私塾とする。寺子屋は近世社会の発展過程において庶民が必要とした文字と計算の教育を行った施設で、形態は慈恵的経営と職業的経営とがあった。教育の内容も私塾と同様に高い水準を持った寺子屋もあった。

私塾（学問塾）の誕生

私塾の始まりは、一七世紀前半から後半にかけて儒学者林羅山や松永尺五ら朱子学者によって開かれた塾である。その後、陽明学の中江藤樹や古義学の伊藤仁斎などが私塾を経営するに至った。

私塾は学者が私的に開いた塾で、政治的制約を受けない自由な学風が特徴の一つであるが、実際には為政者などによる干渉や援助などを受けた塾もあり、私塾と区別して家塾と称している。

全国的に初等教育の寺子屋が盛んな地域は、私塾の需要も必然的に高く、互いの塾は照応する関係にあった。特に一八世紀後半以降は各地に私塾が爆発的に増えた時期である。私塾は儒学（漢学）・国学・蘭学・兵学・天文学・医学など分野別に分かれていたが、漢学は全ての学問に通ずる基礎的学習であったため、私塾の大半が漢学塾であった。自由で開放的な教育が特徴であった私塾は、社会的身分の差なく学ぶことができた。幕末維新期に活躍した逸材の多くが私塾出身者であったことは良く知られている。漢学では藤樹書院・古義堂・咸宜園・泊園書院・松下村塾、国学では鈴屋、蘭学では芝蘭堂・適塾・鳴滝塾などが著名である。

現在、江戸時代から明治初期までに開設された私塾数は全国で約三五〇〇校余りが確認されている。累計では九州・山口の私塾数は約九五〇校を数え、当該地域の教育熱の高さが窺える。

官公立学校



藩校「弘道館」
茨城県水戸市（特別史跡）



あしかが
「足利学校」
栃木県足利市（国史跡）



郷学(校)「関谷学校」
岡山県備前市（特別史跡、講堂は国宝）



私塾「藤樹書院」
滋賀県高島市（国史跡）



すずのや
私塾「鈴屋」
三重県松阪市（特別史跡）



てきじゅく
私塾「適塾」
大阪府大阪市（国史跡）



郷校・私塾「廉塾」
広島県福山市（特別史跡）



私塾「松下村塾」
山口県萩市（国史跡）



私塾「咸春園」
福岡県豊前市（県史跡）



私塾「水哉園」
福岡県行橋市（県史跡）



私塾「西庵精舎」
大分県日出町



私塾「鳳鳴書院」
長崎県佐世保市（楠本端山旧宅と楠本家墓地は国史跡）



私塾「鳴滝塾」
長崎市（シーボルト宅跡は国史跡）

写真提供：（財）特別史跡旧関谷学校顕彰保存会、史跡足利学校事務所、弘道館事務所、福岡県求菩提資料館、（社）福山市観光協会、（財）鈴屋遺跡保存会本居宣長記念館、長崎市

日本の私塾一覧表（江戸時代～明治時代初期の開設塾）

番号	都道府県名	旧国名	日本教育史資料※1	追加調査※2	私塾数
1	北海道	蝦夷	—	8 (11)	19
2	青森県	陸奥	8	6 (6)	20
3	岩手県	陸奥	—	125 0	125
4	宮城県	陸奥	52	18 (43)	113
5	秋田県	出羽	66	5 0	71
6	山形県	出羽	6	11 (3)	20
7	福島県	陸奥	19	1 (22)	42
8	茨城県	常陸	—	23 (6)	29
9	栃木県	下野	19	14 0	33
10	群馬県	上野	39	0 (85)	124
11	埼玉県	武蔵	—	45 0	45
12-1	千葉県	下総	0	25 (1)	56
12-2		上総	25	0 (2)	
12-3		安房	3	0 0	
13	東京都	武蔵	126	166 (2)	294
14-1	神奈川県	武蔵	5	10 0	35
14-2		相模	6	14 0	
15-1	新潟県	越後	27	146 (18)	196
15-2		佐渡	0	5 0	
16	富山県	越中	4	18 (1)	23
17-1	石川県	加賀	14	0 0	22
17-2		能登	8	0 0	
18-1	福井県	越前	6	5 0	28
18-2		若狭	17	0 0	
19	山梨県	甲斐	22	41 (9)	72
20	長野県	信濃	125	31 0	156
21-1	岐阜県	美濃	24	1 0	32
21-2		飛騨	3	1 0	
21-3		旧国不明	0	3 0	
22-1	静岡県	駿河	2	0 0	6
22-2		伊豆	1	0 0	
22-3		近江	1	0 0	
22-4		旧国不明	0	2 0	
23-1	愛知県	尾張	26	46 0	103
23-2		三河	17	14 0	
24	三重県	伊勢	4	18 (2)	24
25	滋賀県	近江	8	2 0	10
26-1	京都府	山城	32	182 0	291
26-2		丹波	1	0 0	
26-3		丹後	1	0 0	
26-4		旧国不明	0	75 0	

番号	都道府県名	旧国名	日本教育史資料	追加調査	私塾数
27-1	大阪府	摂津	12	12 0	36
27-2		和泉	1	1 0	
27-3		河内	5	5 0	
28-1	兵庫県	摂津	7	6 0	117
28-2		播磨	22	21 0	
28-3		但馬	10	1 0	
28-4		丹波	2	2 0	
28-5		淡路	11	35 0	
29	奈良県	大和	2	5 (1)	8
30	和歌山県	紀伊	3	6 0	9
31-1	鳥取県	因幡	1	0 0	8
31-2		伯耆	3	4 0	
32-1	島根県	出雲	28	30 0	144
32-2		石見	38	31 0	
32-3		隠岐	7	10 0	
33-1	岡山県	備前	72	0 0	148
33-2		備中	46	2 0	
33-3		美作	23	5 0	
34-1	広島県	安芸	47	9 0	79
34-2		備後	16	7 0	
35-1	山口県	長門	51	116 0	304
35-2		周防	42	95 0	
36	徳島県	阿波	33	8 0	41
37	香川県	讃岐	—	1 (13)	14
38	愛媛県	伊予	—	6 0	6
39	高知県	土佐	10	22 0	32
40-1	福岡県	筑前	18	32 0	170
40-2		筑後	28	74 0	
40-3		豊前	4	14 0	
41	佐賀県	肥前	7	17 0	24
42	長崎県	肥前	51	41 0	92
43	熊本県	肥後	44	122 0	166
44-1	大分県	豊前	21	27 0	181
44-2		豊後	71	62 0	
45	宮崎県	日向	6	2 0	8
46-1	鹿児島県	薩摩	1	1 0	3
46-2		一部琉球	0	1 0	
47	沖縄県	琉球	—	— 0	—
計			1,458	1,894 226	3,578

一覧表は、文部省編『日本教育史資料』第八・九巻（1892）の「私塾寺子屋表」をもとに、その後に刊行された各都府県の自治体史や地方教育史などの成果を加えて私塾の集成を行った結果である（平成25年3月31日現在）。調査対象は江戸時代～明治初期（学制発布前後）に開設した塾とした。（『廣瀬淡窓と咸宜園—近世日本の教育遺産として—』（日田市教育委員会2013）より転載）

※1 R・ルビンジャー著『私塾』に記載のある私塾総数は、設立年により分類しているため1,493件となっている。日田市では『日本教育史資料』第八・九巻の「私塾寺子屋表」から都道府県別に私塾を分類するとともに心学塾を除いたため、総数に違いがある。

※2 追加調査の数には私塾かどうかの判別が困難な例もあったが、総数に含めた上で該当する件数を（）で表記した。

第一章

九州の儒学者と廣瀬淡窓の咸宜園



此夏、島原城外温泉山ノ前ニアル山。崩レテ海ニ落チ。海水溢レ出テ。人家ヲ漂没ス。水頭ノ及フ所死スル者。十萬人ニ過クト云ヘリ。死人ノ數ハ。實ハ未タ審ニセス。島原料ヨリハ。肥後ノ邊邑ノ人多シトソ。田畑許多漂滅シ。海中ニ多クノ島嶼ヲ生ジタリ。希代ノ大變ト云ヘリ。

此歳ノコトナリ。仙臺ノ藩士林子平。公朝ヨリ罪ヲ得テ。幽囚セラレタリ。子平儒生ニシテ。兵學ニ兼通ス。海國兵談。三國通覽ノ二書ヲ著シテ。外夷ヨリ日本ヲ伺フコトヲ云ヒ。其防戦ノ法ヲ論シタリ。説言ヲ出シテ。人心ヲ搖動スルニ因ツテ。罪セラレタリ。然レトモ。子平カ名。是ヨリ天下ニ施シ。我輩童幼ノ耳ニモ聞エタリ。

肥後八代。光徳寺ノ住持法海ト云フ人アリ。長福寺實月上人ノ子ニテ。法幢上人ノ弟ナリ。幼ニシテ肥ニ養子ニ行ケリ。此人文學ニ長シ。詩ヲ善クス。此比筑前ニ遊ヒ。南漢先生ニ相見ス。生テ其才ヲ賞セラル。歸郷ノ後。七律七首ヲ賦シテ。先生ニ寄ス。先生和韻アリ。其唱和ニ傳ハリ。人説ツテ傳寫セリ。法海此比長福寺ニ來留ルコトアリ。先考子ヲ誘ヒテ。又子カ家ニモ招ケリ。時ニ予始テ五律ヲ學フ。因ツテ其教ニヨリテ。加ヘラル。其後モ。當縣ニ至ルコトアレハ。必往イテ勸ユ。其南漢ニ寄セシ七律ノ内。暗記セシ者一首。此ニ唱和シ。唱古今何人倚洋宮。

西国九州の地に誕生した江戸時代後期最大の私塾「咸宜園」。儒学者廣瀬淡窓のもとには全国各地より学問を志す若者たちが挙って豊後日田を目指した。淡窓の実践した教育は近代の学校に通ずる当時としては画期的なものであった。咸宜園とはどのような塾であったのか。また淡窓が交流し師事した九州の儒学者たちに迫る。

九州の儒学者

江戸時代には広く学芸の世界を概観し、著名な学者・文人・画家・医者等の氏名を取り上げて刊行された書物や番付表などの印刷がある。江戸や京坂など特定された地域と時期であるなど偏りはあるが当時の学芸世界の一端を垣間見ることができ、貴重な資料である。

著名なものに京都を対象とした人名録『平安人物誌』（明和五年〜慶応三年まで計九版）があり、また江戸を対象としたものに『安政文雅人名録』（安政七年・文久三年に続編）がある。そのほか、儒学者だけの番付として、「寛政異学の禁」直前の天明八年（一七八八）に作成された『学者角力勝附評判』がある。しかしながら、ここでも九州の儒学者は上位に見当たらない。

そこで、今回は展示テーマに関連して、思想的または哲学的に優れた儒学者だけでなく、教育者あるいは私塾経営者としての観点から人物を取り上げ、さらにその評価軸を廣瀬淡窓の視点に置いて九州の儒学者を見ていくことにする。従来から知られていたが、淡窓の著述「儒林評」や「懐旧楼筆記」などに儒学者の特徴や人格等が描写されている。「儒林評」は次のように始まる。

「近世儒林ノ人物ハ。先哲叢談ニ略ボ載セタリ。然レトモ其品目ヲナスニ至リテハ。其人ノ心ニアリ。且叢談ノノスル所モ僅々タリ。余固ヨリ廣ク

他書ヲ考フルコト能ハズ。但シ邦儒ノ著述ナド少々讀ミテ。其人ノ一斑ヲ知ル所アリ。今口ニマカセテ。其見ル處ヲ述フルノミ。（後略）」

ここでは著名な儒学者の名と各学派に触れ、個々に説明を付した後、九州の儒学者が登場する。

「（中略）我海西九州ノ文學ハ。肥前ノ僧大潮ヨリ開ケタルコト多シ。大潮ハ徂徠ヨリ少キコト十三歳。徂徠ノ弟子ニハ有ラネドモ。其交親シク。學問詩文。徂徠ノ説ニヨリテ修セシ人ナリ。徂徠歿後。其餘聲天下ヲ動カス。海西ノ人。其風ヲキキテ慕ヒ。皆大潮ニ從テ其説ヲ學ビシナリ。我郷ニ僧法蘭・寶月アリ。文辭ヲ能クセリ。皆大潮ノ弟子ナリ。予ガ幼時從遊セリ。筑ノ南溟先生、肥ノ高君秉。黃道符。皆大潮ノ弟子ナリ。（後略）」

「儒林評」の記述には、僧大潮の後に三浦梅園（P8詳述）、亀井南冥、亀井昭陽、原震平（古処）、田能村竹田、中島子玉などが続く。

【亀井南冥】（一七四三・一八一四）

筑前早良郡の村医亀井聰因の長男。名は魯、字は道載、通称は主水、号を南冥とした。亀門学の祖である。先述した僧大潮に学んだ後、永富独嘯庵に師事した。宝暦一二年（一七六二）に博多唐人町で医業をする傍らで私塾を開いて教授した。安永七年（一七七八）に福岡藩は南冥を儒医とし、六年後、藩の学問所・甘棠館の祭酒（学長）となった。淡窓は一六歳のとき、南冥の門下として二年余りの期間学んだ。その時の経験が咸宜園の運営

に大いに参考とされた。「亀井（南冥・昭陽）家の墓」（福岡県指定史跡）

【亀井昭陽】（一七七三・一八三六）

南冥を父に持つ昭陽は若年にして周防岩国の役藍泉に師事した。頼山陽や古賀穀堂と共に「文政の三太郎」と称された才能の持ち主であった。寛政四年（一七九二）に寛政異学の禁に影響を受け、南冥が藩より罷免されたことから家督を継ぎ藩儒として採用された。六年後に甘棠館が火災で焼失した後は廃校となり、免官となった。その後は私塾「百道社」などを経営し、廣瀬淡窓や旭莊、岡研介など咸宜園出身者が遊学した。

【原震平】（一七六七・一八二七）

筑前秋月の人。本姓は手塚、名は叔暉・震、字は士萌、通称は震平、号はじめ臥雪のち古処山人とした。秋月藩士手塚辰詮の次男として生まれる。幼年より学問を好み、その優れた資質を買われて秋月藩校稽古館の教授原担齋の養子となる。18歳のとき藩命にて亀井南冥の甘棠館に入門した。南冥曰く「詩文の才能は自分以上である。息子の昭



左：亀井昭陽、右：亀井南冥（公益財団法人亀陽文庫）

陽も貴方には敵わない。」と評した。天明七年（二七八七）に稽古館の訓導に就き、その後、寛政一二年（一八〇〇）三四歳で稽古館の教授に就任した。古処は稽古館の隣にあつた自分の屋敷で私塾を開いていたが門下生の増加に伴い、文化二年（一八〇五）に藩主黒田長舒の許可を得て屋敷地を拝領し新たに私塾「古処山堂」を開いた。文化九年、稽古館教授を含めすべての役職を失い、同一〇年長男瑛太郎（白圭）に家督を譲つて四七歳で隠居した古処は妻ゆきや娘の猷（みち）。後の原采蘋）、次男の瑾次郎（鳩巢）を伴つて九州各地や中国地方を旅した。旅行の際には、師龜井南冥の遺品「東西南北人」と刻印された印章を常に携行した。病のため文政十年（一八二七）に享年六一歳でその生涯を閉じた。墓所は秋月の西念寺。墓碑銘「原古処先生之墓」は頼山陽の書、墓碑側面には廣瀬淡窓作の漢詩が刻まれる。古処の詩は『古処山堂詩集』などに収載される。娘の原采蘋（猷）も女流詩人として著名である。

【協蘭室】（一七六四〜一八一四）

豊後国速見郡小浦村（現在の日出町豊岡）出身の儒学者。名は長之、字は子善、通称は儀一郎。蘭室、菊園、愚山と号した。明和元年、小浦村の庄屋であつた協家の分家に生まれた。先祖は南北朝時代の南朝の忠臣脇屋儀助（新田義貞の弟）と言われる。天明四年（一七八四）、二一歳の時に熊本藩の藩校時習館を訪ねて菽孤山に朱子学を

半年間学び、豊後の三浦梅園、大坂の中井竹山の懷徳堂で学業を修めた。寛政元年（一七八九）、蘭室は帰郷して私塾「菊園」を開いた。同三年（一七九一）には帆足万里が一四歳で入門している。寛政九年に藩校時習館の訓導として迎えられたが、他藩出身の蘭室は受け入れられず、翌年、同館を辞すことになる。しかし、その才を惜しんだ藩主・細川斉茲により、熊本藩の飛び地であつた大分郡鶴崎（現在の大分市）に迎えられて塾を開き、藩士子弟の教育にあつた。この塾での高弟に毛利空桑がいる。文化一一年（一八一四）に逝去。享年五一歳であつた。大分市鶴崎寺司浜には、帆足万里の書で「文教脇先生墓」と刻まれた墓がある。「協蘭室墓」（大分県指定史跡）

【田能村竹田】（一七七七・一八三五）（P22詳述）

【帆足万里】（一七七八・一八五二）
「帆足万里墓」（大分県指定史跡）（P8詳述）

【草場佩川】（一七八七・一八六七）（P22詳述）

【毛利空桑】（一七九七〜一八八四）

豊後国大分郡

高田郷（現在の
大分市鶴崎）出身の儒学者、教育家、尊皇論者。名は俛、字は慎甫、通称は



毛利空桑（大分市教育委員会提供）

あつた豊後国大分郡高田郷常行で、熊本藩の藩医毛利太玄の第二子として生まれる。一四歳の時に高田郷で塾を開いていた脇蘭室に師事。文化十年（一八一三）には、速見郡日出の帆足万里のもとで儒学を学び、その後、熊本藩の藩校時習館、福岡藩の龜井昭陽にも学んだ。

二八歳で帰郷して、自宅と塾を建て、自宅を天勝堂、塾を知来館と称した。知来館の門弟は千人を超え、空桑が説いた尊皇思想は明治維新にも影響を与えた。吉田松陰や斉藤監物らも塾を訪れ、空桑と意見を交わしたと言われる。明治一七年（一八八四）に八八歳で没した。旧宅及び塾跡の一部が保存されている。「毛利空桑旧宅及び塾跡」

「毛利空桑墓」（いずれも大分県指定史跡）

【恒遠醒窓】（一八〇三・一八六一）
「蔵春園跡」（福岡県指定史跡）・「蔵春園関係資料」（豊前市指定有形文化財（歴史資料））（P14・15詳述）

【村上仏山】（一八一〇・一八七九）
「仏山塾（水哉園）跡」（福岡県指定史跡）・「仏山塾関係資料」（福岡県指定有形文化財（歴史資料））（P16・17詳述）

【楠本端山】（一八二八・一八八三）「楠本端山旧宅と楠本家墓地土墳群7基」（長崎県指定史跡）（P20詳述）

【楠本碩水】（一八三二・一九一六）（P20詳述）

到。寛政九年（一七九七）に、熊本藩の飛び地で

コラム「豊後の三賢」

三浦 梅園（一七三三―一七八九）

国東郡富永村（現在の国東市）出身の哲学者。「条理学」の提唱者。名は晋、字は安貞、号は梅園とした。三浦家は先々代より医を業としたが、その傍らで農業も営んだ。

梅園は、最初、豊後国杵築藩の綾部綱齋に学び、続いて豊前中津藩の藤田敬所に師事した後は長崎などに遊学した。少年時代より読書を好み、早くから天地造化の理に疑問を呈し、中国の天文学の書物などを学び、自ら天象を模した器械を作製して思索に熱中した。哲学者の一方で優れた科学者の一面を持つており、その才能は天文学から生物学、医学、文学など多岐にわたった。「梅園三語」とする書物には、儒学と洋学の思想の調和により宇宙の構造を説明した「玄語」「贅語」のほか、道徳を論じた「敢語」がある。

廣瀬淡窓はその著「儒林評」に梅園を次のように評した。「我豊後ニテ先輩ノ高名ナルハ。杵築ノ三浦安貞ナリ。安貞ハ條理學ト云フ事ヲ。自ラ始メタリ。宋儒窮理ノ説ニ似テ。少シク異ナリ。生涯仕ヘズ。弟子ヲ教授スルコトヲ事トセリ。從遊ノ者。筑ノ龜井ト相比セリ。海西ニテ。四方ヨリ生徒ノ多ク聚マルコトアルハ。三浦龜井ノ二先生ヨリ始レリ。三浦ノ門人ニ。協義一郎ト云フ儒者アリ。予ガ童幼ノ時。書信往復セシコトアリ。即チ日出ノ帆足愚亭方師ナリ。帆足モ窮理ヲ好ミ。又生徒ヲ教授スルコト。三浦ノ學脉ヨリ傳フル處アリト覺ユ。安貞ノ子修齡。予嘗テ相見ス。杵築公ニ仕ヘタリ。コレモヨキ儒者ナリ。今ハ歿セリ。」梅園は寛政元年に逝去し、享年六七歳であつた。



帆足 万里（一七七八―一八五〇）

豊後国日出藩の儒学者。名は万里、字は鵬

卿、通称は里吉で号を愚亭とした。日出藩家老の帆足兵部通文の二男。寛政三年（一七九二）一四歳の時に三浦梅園

や脇愚山（蘭室）に学んだ後、大坂の中井竹山や筑前の龜井南冥らに師事した。特に同郷の先哲・梅園の学問に深く影響を受けた。万里の学問は幅が広く、和漢の学術を究めた上に、天文・律曆・医術・算数・仏教・経済・蘭学にも精通していた。経学は程朱の学、いわゆる宋学を基本としながらも、漢唐の訓詁学や我が国の荻生徂徠・伊藤仁斎・中井履軒等の説をも参考折衷して自家独自の見解を持つていた。

享和三年（一八〇三）日出藩の認可と援助を受けて家塾「稽古堂」を開設。翌年には藩に出仕して藩学教授となった。天保三年（一八三二）五五歳の時に家老となったため、一旦家塾を閉じて藩財政の立直しに奔走する。同一三年には藩務を辞して隠棲し、私塾「西庵精舎」を創めた。門下には儒学者毛利空桑や本草学者賀来飛霞などがいるが、飛霞は精緻な「西庵精舎図」を残している。万里の代表作に西洋の自然科学に通じた科学書『窮理通』がある。万里の嗣子亮吉（旧姓は吉田）は咸宜園門下生で、後に万里のもとで学んだ人物である。廣瀬淡窓は万里のことを自叙伝「懷旧樓筆記」に触れた。「寛政十三年辛酉。予歳二十。（中略）此春。日出ノ藩士。帆足里



吉来訪ヘリ。（中略）名ハ万里字ハ鵬卿ト稱ス。幼ヨリ學ヲ好ミ。博聞強記ニシテ。文章ヲ能セリ。今年二十四歳ナリ。此人。後來其名益高ク。一世ニ於テ。大儒ノ稱ヲ得タリ。」嘉永五年に逝去。享年七五歳。

廣瀬 淡窓（一七八二―一八五六）

日田郡豆田町（現在の日田市）出身の儒学者・教育者・詩人。名は簡のち建、字は廉卿、子基、通称は求馬。淡窓は号である。廣瀬家の家業は代々商家を営んでいたが、後に幕府の掛屋や諸藩の御用達を務めた豪商でもあつた。淡窓は幼少より父桃秋から習字の手ほどきや『孝経』の講義を受け、伯父で俳人の月化にも文学的側面で影響を受けた。その後、儒学者の松下西洋や龜井南冥に師事した後、家督を弟の久兵衛にゆずり学問の道に進んだ。

文化二年（一八〇五）豆田町の長福寺境内で学寮を借りて開塾し、塾生二人と共同生活しながら教授したのが咸宜園の始まりであつた。その後、「成章舎」「桂林園」と場所や塾名を変えながら変遷し、文化一四年に現在の場所に「咸宜園」を開く。塾名の「咸宜」とは『詩経』から取った言葉で「咸く宜し」と言う意味である。塾は、当時としては画期的な「三奪法」があり、入門に際して「身分・年齢・学歴」の三つを奪った。これにより全国各地の青年たちが集まつてきた。一方、塾内では徹底した実力主義が実践され、毎月実施される試験の結果により進級する制度を導入し、その成績は毎月二五日前後に口頭で発表され、月初めには塾内に成績表が貼り出されることになつていった。これを「月旦評」と呼んだ。その他、塾の自治を生徒にまかせるため、様々な役割を塾生に与えて社会への適応性を身に付けさせた「職任」制があつた。近代教育の先駆けとも言える画期的な教育システムを整えた咸宜園には全国各地から塾生が集まり、明治三〇年に閉塾するまで約五〇〇〇名もの門下生を輩出した。主な門下生には兵学者の大村益次郎や写真術の上野彦馬等がいる。淡窓は安政三年（一八五六）、七五歳の生涯を閉じた。



私塾「咸宜園」

文化一四年（一八一七）、儒学者廣瀬淡窓は豊後国日田郡に私塾「咸宜園」を開設した。江戸時代を通じて他塾を圧倒する規模を誇っていたが、全国から入門した塾生の数だけでなく、近代の学校にも通じる教育システムと塾舎建築など教育環境も整っていた。入門簿に記載された塾生は四七九七名を数える。その内、三五二名は淡窓の末弟旭荘が日田を離れて大坂などで開いていた塾の入門者数である。しかしながら、嘉永元年に作成された咸宜園の成績表「月日評」には大坂の塾生も同じ成績表の中に記録されており、当時の旭荘塾は咸宜園の分校的存在と思われる。

当時の塾は師匠が自宅で教授するか、あるいは既存の建物を改築するなどして講堂や寮を整備することが通例であったが、都市部では借宅で開くことも多かった。咸宜園の



ように土地を新たに買い求めて塾舎を建築する例など非常に稀であったと言える。咸宜園の始まりは文化二年の長福寺学寮を借りての開塾であったが、その後も町家を間借りした「成章舎」や生家の土蔵で教授するなど、初めて塾舎を建築したのは文化四年の「桂林園」開塾の時であった。現在、明治一六年と大正二年に作成された「咸宜園絵図」があるが敷地は東西に広がり、塾主の居宅や東西二つの講堂、東塾や南塾と称した学生寮など遠地から遊学する学生のために生活環境も整っていたことがわかる。明治絵図には隣の民家を借り上げて北塾と記しており如何に塾が盛況だったかもわかる。

咸宜園の教育

咸宜園教育の特色は、淡窓が長年にわたる教育実践の中で工夫を重ね、改良を加えて創り上げた教育システムにある。それは塾生の個性を尊重し、徹底した平等主義と実力主義、そして実学主義の追及でもあった。

学習内容は、漢学塾のため四書五経や中国の歴史書、漢詩集などを中心として、成績等級別に素読・輪読・輪講・会読などの学習となっていた。塾生は入門時に「身分・年齢・学歴」を奪われる「三奪法」により、全ての生徒が無級に位置づけられて学習がスタートした。学習機会も成績毎に分けられていたが、無級の次は一級で一番上は

九級となっており、その上、各級には上下の別があったため、全部で一九等級であった。毎月二五日頃に進級者の発表があり、次月の初めに「月日評」と呼ばれた在籍者全員が掲載された成績表が貼り出された。その他、咸宜園には塾則（八二項目）や塾内での生活態度を律する告諭（生徒心得）があり、これに違反すると退塾させられた例もある。規則正しい学習と生活が続く咸宜園にも毎月「放學」と称した日があった。塾生を学問や塾則から一時解放し、時には市内各所に淡窓と出かけては皆で弁当を開き、詩作に興じる場面もあった。

咸宜園の門下生

- 〈僧侶〉小栗栖香頂（真宗中国布教の先鞭者）、釈徳令（私塾修文館）、唐川即定（咸宜園第五代塾主）、平野五岳（詩書画の三絶僧）、赤松連城（儒学者）中島子玉（佐伯藩儒）、谷口藍田（鹿島藩儒）、恒遠醒窓（私塾蔵春園）、秋月橘門（葛飾県知事）、楠本端山・碩水（平戸藩儒）
- 〈蘭学者〉岡研介（鳴滝塾塾頭）、高野長英
- 〈歌人・画人〉大隈言道（歌人）、帆足杏雨（南画家）
- 〈政治家〉大村益次郎（兵学者）、松田道之（東京府知事）、長三洲（文部 大丞）、清浦奎吾（内閣総理大臣）、横田国臣（大審院長）
- 〈実業家〉朝吹英二（三井・三菱財閥の役員等）
- 〈その他〉上野彦馬（写真術の祖）、山本晴海（砲術家）、小林安石・玉井忠田（医家）

九州の私塾と 咸宜園教育の広がり



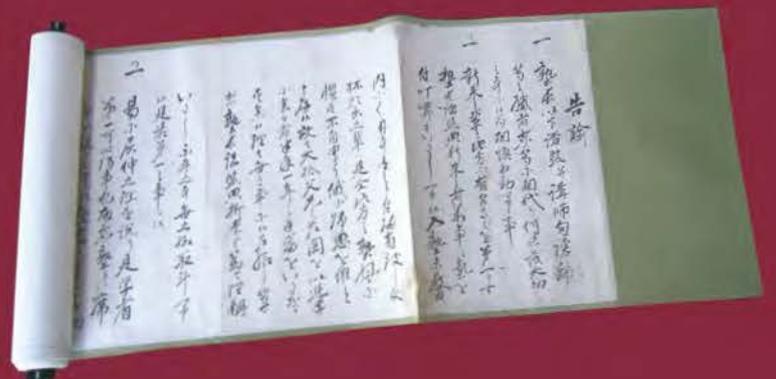
咸春園



鳳鳴書院



西嶋精舎



江戸時代後期から幕末の頃、九州では都市部だけでなく、農村部に至るまで数多くの私塾が開かれた。特に豊前や筑後地域では塾生千人を超える規模の私塾も見られ、これらの塾には咸宜園教育の影響やその門下生たちが深く関わっていた。日本の近代化に大きく貢献した逸材を数多く世に送り出した九州の私塾について概観する。

九州の私塾の始まり

現在、知り得る限りでは江戸時代の私塾は京都の例に見る慶長九年（一六〇四）に開設した松永昌言の講習堂を嚆矢として、松永尺五の春秋館（寛永五年へ一六二八）や中江藤樹の藤樹書院（寛永一三年へ一六三六）、伊藤仁斎の古義堂（寛文二年へ一六六二）などがその代表例として知られている。

九州では、京都の講習堂に遅れること約半世紀後の慶安年間（一六四八・一六五二）に長崎で開設した向井元升の輔仁堂が、九州で一番最初に創められた私塾とされている。元升（儒医）は長崎聖堂の創設者で祭酒（学長）を務めていた人物である。続いて、山鹿高道（祖父は山鹿素行）が延宝三年（一六七五）に肥前平戸で開いた積徳堂、賀島恕軒（兵介）が肥前対馬で貞享四年（一六八七）頃に開いたとされる塾などがあるが、いずれも塾主は武士によるものであった。

また、他地域では筑後生葉郡の延宝年間（一六七三・一六八一）開設の宮川尚古の例や豊前宇佐郡の清野善愚が元禄一年（一六九八）に開塾したことが伝わる。

その後、一八世紀前半頃には九州各地（宮崎・鹿児島地方は一九世紀以降）で私塾が開設されたが塾主は以前として武士や医家、僧侶、神官などの身分に限られていた。

咸宜園教育の広がり

全国的な私塾の広がりは天保期（一八三〇・四三）以降とされるが、理由の一つは官公立の学校が次々と開校し、武士階級の就学者が増えたことでそれを補完する役割が私塾に求められたとされる。もうひとつの要因は寺子屋の増加傾向に照応した庶民教育の需要増大が上げられている。

そのような中で、文化一四年（一八一七）開設の咸宜園は特色ある教育システムで全国各地から入門者を集めたが、その咸宜園門下生たちの多くは日田での勉学を終えた後、更なる学問の道に進んだ者や帰郷して仕官するか、あるいは私塾を開くなど教育者として活躍する者が少なくなかったことである。特に、豊後や筑後地域ではその傾向は顕著であり、地域の教育普及に大いに貢献したことが明らかとなっている。咸宜園の教育がどの範囲にどのようなようにして広まっていったのかは現時点では明らかになっていないが、まずは淡窓の著述資料からその広がりの様子を概観する。淡窓の自叙伝「懐旧樓筆記」には次のような記事がある。

・文化二年の項「此年ノ八月。成章舎ニ於テ。始メテ月旦評ヲ作ル。（中略）当時ハ余カ門人帷ヲ垂テ業ヲ講ズル者。諸国ニアマネシ。皆月旦ヲ作ラサルハナシ。余カ門人ニアラサル者モ。亦其風ヲ聞キテ。之ニ倣フ者多シ。或ハ文学ニ與ラヌ他芸ヲナス者迄モ。往々ニ此風ニ倣ヘリ。

教フル者モ之ヲ以テ教ヘ。学フ者モ此ヲ以テ学フ。因ツテ当時ノ学風大ニ古昔ト変シ。殆ト漢人ノ科挙ノ業ヲ習フカ如シ。抑百事皆一得有レハ一失有リ。一利アレハ一害アリ。後人此事ヲ論センニ。余ヲ以テ功首トセンカ。将夕罪魁トセンカ。（後略）」

この項での当時とは、「懐旧樓筆記」を著した嘉永三年（一八五〇）、淡窓六九歳頃の状況である。当時は咸宜園出身者が開いた私塾が各地に所在し、月旦評（成績評価表）を採用しないものはなかったとする。また、淡窓の門下生でなくとも、咸宜園方式に倣い月旦評を使っていた塾が多かったことを記した。注目されるのは、月旦評を利用したのは漢学塾だけでなく、他芸（茶や生け花など）その他の習いごとであろう。）の塾まで浸透していたことである。淡窓もその広がりを「教える者もこれ（月旦評）をもって教え、また学ぶ者もこの方式で学ぶ」と表し、最後に当時の学習方法が以前のそれとは大きく異なっていた事実を述べている。

次頁以降では主な九州の私塾を示し、また咸宜園教育の影響を受けた私塾や交流のあった私塾などを数例紹介する。

九州の主な私塾分布図

江戸時代の九州には約 640 箇所の私塾が開設されました。ここでは各地区において、とりわけ早く開塾した例や著名な塾、又は咸宜園門下生が開いた塾や咸宜園と関係の深い塾について紹介します。

1. 笛塾 (竹田定直) 大野城市 [1724年頃] 藩校修猷館初代館長は孫
2. 亀井塾 (蜚英館) → 百道社 (百地林亭) 福岡市 (亀井南冥) (亀井昭陽→陽洲) (南冥・昭陽は淡窓の師)
3. 柳園社 (青柳種信) 福岡市
4. 古処山堂 (原古処) 朝倉市
5. 梅西舎 (佐野文洞) 朝倉市
6. 亦楽舎 (秋重梅庵) 朝倉市

7. 宮川塾 (宮川尚古又は忍斎) うきは市 [1670年代]
8. 三省堂 (牛島毅斎→川口貞次郎→川口深造) 八女市
9. 三楽学舎 (重富健助→改名北原揚水) 久留米市
10. 柳園塾 (井上知愚又は直次郎→昆江) 久留米市
11. 嚶鳴館 (重富鼎又は繩山) 久留米市
12. 修文館 (木屋徳令) 八女市 (筑後地方最大・門下生3千名)

13. 湯山堂 (平石又左衛門) 田川郡香春町 [1818年] (塾主は農民)
14. 巖邑堂 (藤本雪蔵) 京都郡みやこ町
15. 水哉園 (村上佛山) 行橋市 (県史跡：門下生3千名)
16. 咸春園 (恒遠醒窓→精斎) 豊前市 (県史跡：門下生3千名)
17. 義井塾 (伊藤俊明) 田川市 (又は田川郡川崎町)
18. 小野原塾 (小野原善言) 築上郡築上町

24. 輔仁堂 (向井元升) 長崎市 [1650年頃] (九州で最初の塾?)
25. 積徳堂 (山鹿高道) 平戸市 (高道は山鹿素行の孫)
26. 克己塾 (土井範四郎) 諫早市 (漢学や裁縫等を教授した男女共学)
27. 吉雄塾 (吉雄幸作→権之助) 長崎市 (塾主は通詞)
28. 弘文堂 (永瀬仁七郎) 対馬市
29. 鳴滝塾 (シーボルト) 長崎市 (シーボルト宅跡は国史跡)
30. 鳳鳴書院 (楠本端山・碩水) 佐世保市 (端山旧宅等は県史跡)



19. 彊亭塾 (吉武法命) 唐津市 [1730年代] (法命が塾主となり巡講した唐津7塾の一つ)
20. 中西塾 (中西志良) 藤津郡太良町
21. 擷芳園 (前田利方) 旧裏村 (所在地不明)
22. 時宗学舎 (石井南凱) 藤津郡太良町
23. 巖山書院 (谷口中秋又は藍田) 武雄市

31. 二龍亭 (杉谷亨) 旧田島村 (菊池市?) [1723年]
32. 傳習堂 (松井盈之) 八代市
33. 思斎堂 (玉木小助) 苓北町 (慶応元年の塾生数400名)
34. 深水塾 (深水玄門) 熊本市高台寺町 (咸宜園と交流)

凡例：赤：咸宜園門下生 青：咸宜園と関係する私塾
 記入例：番号・塾名(塾主名)所在地 [開塾年代]
 ※塾名が不詳の場合は塾主の姓を使用して〇〇塾とした。

35. 清野塾 (清野善愚) 宇佐市 [1698年]
36. 遷喬舎 (野本亮右衛門) 中津市
37. 養翼園 (村上姑南) 中津市 (咸宜園第7代塾主)
38. 晩光堂 (白石照山) 中津市 (師は村上佛山) 家塾
39. 培養舎 (横井忠直) 中津市 (「好太王碑」の碑文解説をした人物)
40. 山川塾 (山川東林) 中津市 (咸宜園の塾制を参考に開塾)

41. 輔仁堂 (関正軒) 竹田市 [1729年]
42. 梅園塾 (三浦梅園) 国東市 (三浦梅園旧宅は国史跡)
43. 菊園 (脇蘭室) 日出町 (帆足万里は門下生、墓は県史跡)
44. 稽古堂→西庵精舎 (帆足万里) 速見郡日出町 (墓は県史跡)
45. 咸宜園 (廣瀬淡窓ほか) 日田市 (咸宜園跡は国史跡)
46. 知来館 (毛利空桑) 大分市 (毛利空桑旧宅及び塾跡は県史跡)
47. 学半舎 (園田鷹巢) 玖珠町 (実弟は鷹城。門下生1千名を越す)
48. 三亦舎→対岳楼 (矢田希一) 別府市
49. 有田塾→発蒙寮カ (園田鷹城) 日田市 (咸宜園第6代塾主)
50. 三隈義塾 (諫山菽村) 日田市 (咸宜園第9代塾主)

恒遠醒窓と「蔵春園」

恒遠家は四国伊予の豪族河野氏の
一門で、遣明船の警護や貿易などに
従事した河野水軍がその祖先とされ、
室町時代初期に豊前の地に移り住んだとされ
ている。その後、江戸時代初期に現在の恒遠姓を名乗るようになった。



醒窓は、享和三年（一八〇三）に恒遠伝内の二男として豊前国上毛郡葉
師寺村に出生し、幼名は和市、長じて頼母とした。号は醒窓。咸宜園には
文政二年（二八一九）一七歳で入門し、在塾五年の間に塾頭も務めた。また、
退塾後は長崎に遊学し、兵学者の高島秋帆宅に寄寓し、多くの文人墨客と
交流を図っている。文政七年、帰郷して私塾「自遠館」を開設し、これが
後に「蔵春園」となった。醒窓没後もその子精齋が塾を継承し、明治に入
ると「蔵春学校」と名を変えたが明治二八年（一八九五）まで存続した。

その他、恒遠家からは弟の運平
（後の西秋谷）や醒窓の甥で次三郎
（号は香農）が咸宜園に入門してい
る。運平は咸宜園で都講（塾内の
最高責任者）を務めた人物で、咸
宜園一八才子の一人に数えられて
いる。その後、筑前の亀井昭陽の
門で学び、長崎では蘭学、熊本で
は医学を修めた。明治二年、豊津
藩庁が藩校「育徳館」に医学寮を
設けた時に教頭に迎えられている。
恒遠家は同じ豊前の村上佛山とは
漢詩人としての深い親交があった。



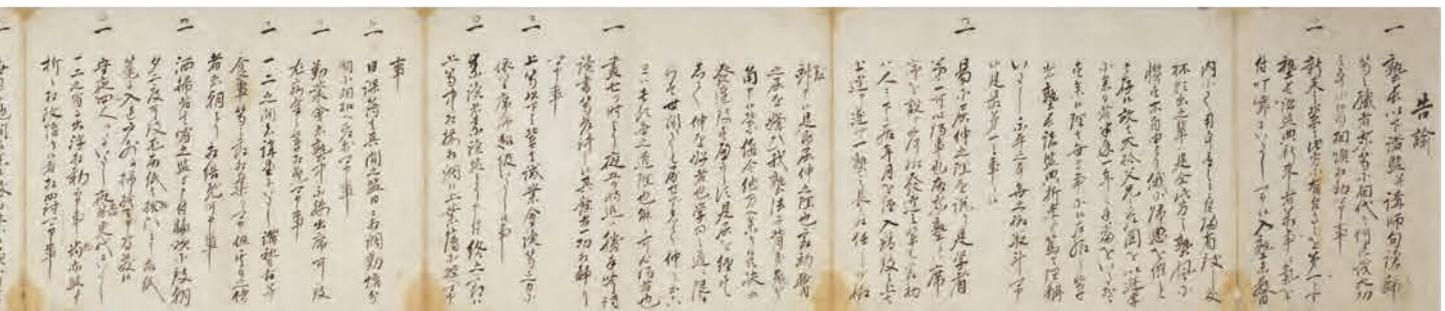
求溪舎（右は晴雪軒）

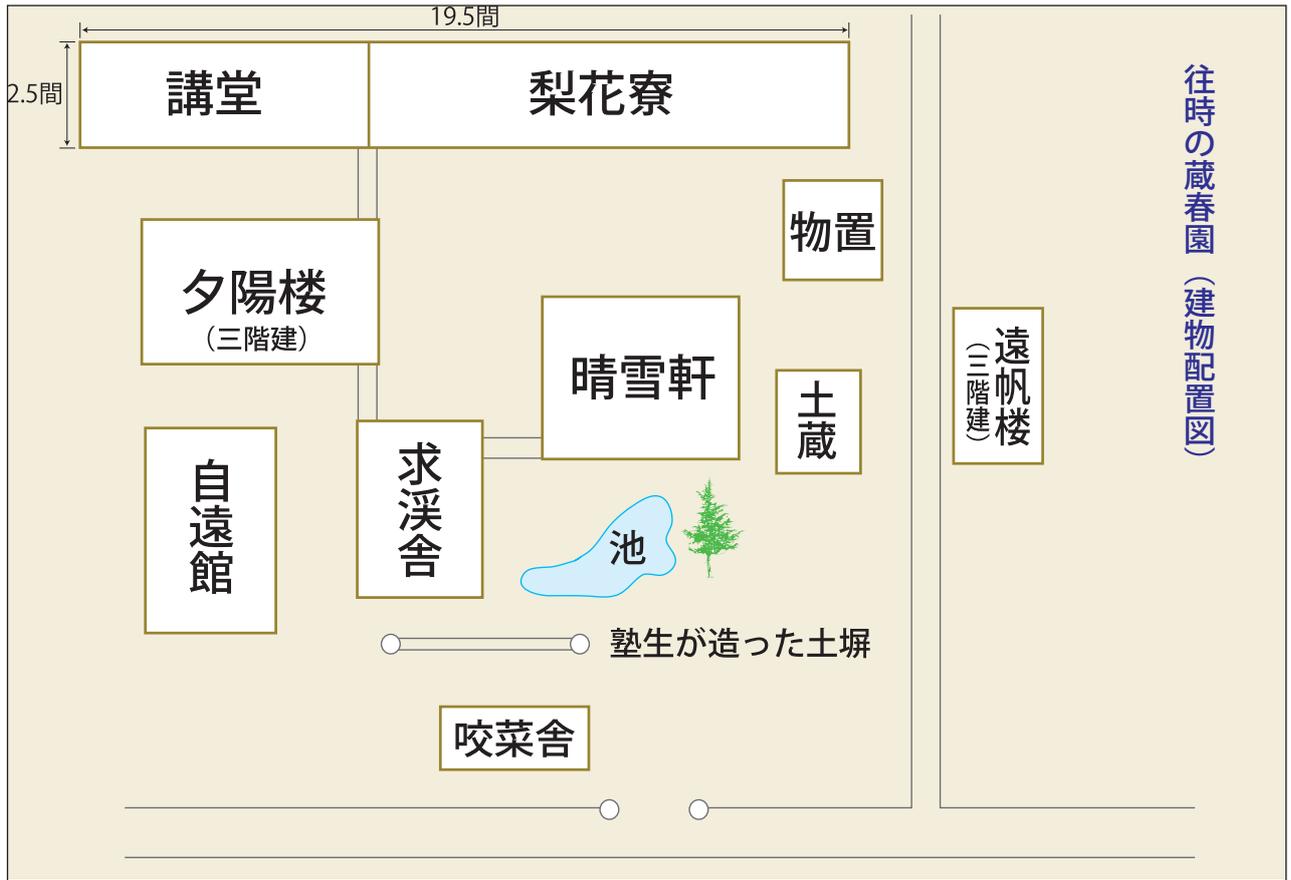
蔵春園の教育

蔵春園の教育は、漢学塾であったが醒窓が学
んだ咸宜園での経験を大いに生かし、咸宜園方
式の教育方法に倣ったものが多い。塾生は学力
に応じて一九等級（最下級を無級、下から九級
八級・・・一級となり其々の級に上下の別があ
る。）に分けられており、等級は平素の成績と
臨時の試験とによって判断され、次第に進級し
た。また、全員の席序を毎月「月日評」によつ
て公表し、塾生たちの奮起を促した。現在、昇
級する際に積み重ねた点数（加点数）を個人毎
に記録した「旧点簿」が残る。

学習は等級を三つに大別し、上会生（五級
以上）、中会生（六・七級）、下会生（八・九級）
ごとに内容が定められ、段階的に行った。まず
は素読・輪読に始まり、その後は講義形式に移
行し、続いて塾生同志の討論会や会読という学
習方法を採用した。学習の総仕上げは独見会（研
究発表会）であった。当時の漢学塾では漢詩や
漢文の作成を重要視することが多かった。

また、醒窓が塾生に示した「告諭」が残され
ている。今日の「生徒心得」といった内容であ
るが、規則正しい生活を行うことが学問の上達
にとって重要であった点は咸宜園でも同じであ
る。その他、蔵春園には使用したテキストや塾
生使用と伝わる文机などが保管されている。





往時の蔵春園（建物配置図）

蔵春園の門下生たち

蔵春園の門下生については、明治時代に蔵春学校と名前を変えるまで約七十年間に三千名を超える入門者がいたと伝わる。その内の一部は現在も残る入門簿で確認することができる。また、安政六年刊行の『遠帆楼同社詩鈔』には蔵春園の門下生について次のように記されている。「醒窓先生弟子千有余人其能詩不少・・・」。

僧 月性（妙円寺第十世・私塾「時習館」主宰）

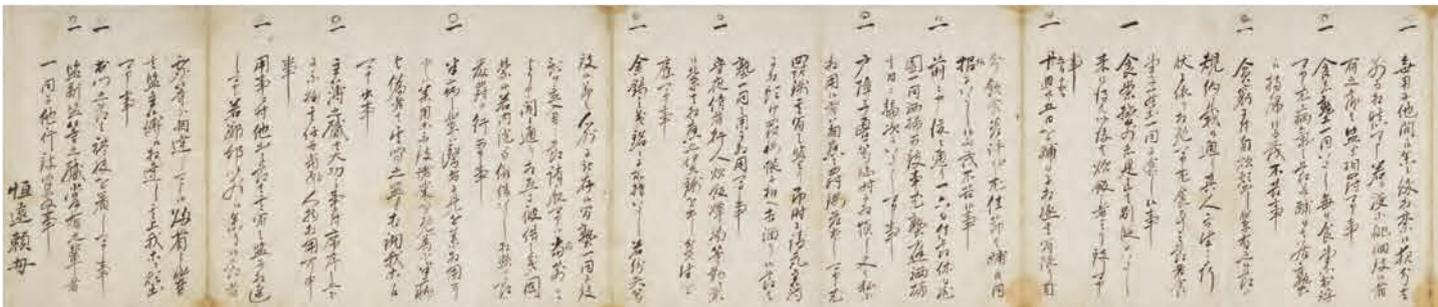


周防国大島郡の出身。蔵春園には一五歳で入門。生涯を尊王攘夷、討幕運動にささげた人物で「海防僧」の異名をとった。また、

親交が深かった吉田松陰にも影響を与えた人物とされる。月性は当初、蔵春園の廣瀬淡窓の門下となることを望んだとされるが、淡窓は病氣療養中であり入門はかなわなかったようだ。

白石廉作（志士）

長州下関の出身。本家は酒造業、廻船問屋を営む豪商の小倉屋である。蔵春園には一五歳のときに入門した。安政元年に退塾した後は下関に帰郷し、高杉晋作らが奇兵隊を結成するとそれに加わり但馬国生野で倒幕拳兵するが、敗れて斬罪となった。



告諭（蔵春園蔵）

村上佛山と「水哉園」

佛山は、文化七年（一八一〇）に豊前国京都郡上稗田村の郷土・村上盛之の三男として生まれた。幼名は健平。兄の暁之は新津手永の大庄屋を務めている。父・盛之は佛山二一歳のときに死別し、佛山は母・お民を生涯にわたり支えた。佛山の学問の始めは九歳の頃、津積村大島八幡宮の定村直榮に師事し、その後は一五歳で筑前秋月の原古処の塾に入門、その子・白圭にも学んだ。以後、京師の貫名海屋や筑前の亀井昭陽などにも師事した。天保六年、二六歳で地元の上稗田に私塾「水哉園」を開設し、漢学を教授した。全国から集まった塾生は、三千人にも及んだ。塾名にある「水哉」は『孟子』の中の孔子の言葉を引用したもので、「水の流れに源があるように、学問も根本が大切である」という意味が込められている。恒遠醒窓の「蔵春園」と並んで、幕末維新期の北部九州を代表する私塾であった。

佛山は明治一二年（一八七九）享年七〇歳で逝去。塾はその後も継続され同一七年まで続いた。

佛山の代表作に『佛山堂詩鈔（全四編）』があるが、第一編には篠崎小竹の序や梁川星巖、廣瀬旭莊など当世の著名な詩人が文を寄せている。水哉園と咸宜園の関係は、詩鈔が咸宜園で教材として利用されたことや佛山の門下が咸宜園に遊学した記録などが双方の史料に見られる。

水哉園の教育

水哉園の教育は咸宜園と同様に詩文にその重きを置いていたことが日記からも明らかである。塾生は毎月末に実施される詩文の解釈や数人で行う輪読などの試験によって進級し、その成績は「席序」表として毎月作成された。等級は上級・中級・下級に大別し、さらに級毎に上中下を設けるなど全九級制とした。表には塾内での役職（都講、塾長、塾監等）も名前の側に記載されるなど咸宜園の月旦評に倣ったものと考えられる。佛山の交友関係は広く、咸宜園の歴代塾主や豊前出身の咸宜園門下生なども親交があったことから、咸宜園教育の影響を受けたのであろう。友石孝之は、水哉園の教育の特徴について、「水哉園では、知恵よりも先ず道義を教え、理屈よりも先ず実践を尊重させた。」と語っている。

水哉園の年中行事

塾では毎月朔日に全生徒が佛山に拝礼すること、また一五日は全員で塾舎の大掃除をすることになっていた。その他、佛山の日記からは年中行事に関する記載が多く見られるが、神事・祭事・詩会・吟行などが最も多く、星会や蛭を觀賞する会などもあった。仏山と塾生たちが生活を共にしながら学問に取り組む様子が具に感じられ、自由で開放的な塾風であったようだ。

水哉園の門下生たち

現在、水哉園には天保五年（一八三四）から明治一七年（一八八四）までの「入門姓名録」がある。記載される門下生の数は一二六三名に上り、その内、豊前出身者は九一九名を数える。一時的な通塾生も含めると約三千名の門下生が学んだとされる。塾は明治初期に隆盛を迎えた。

守田蓑洲（大庄屋）

豊前仲津郡沓尾村の大庄屋に生まれた。水哉園では初代塾長を務め、新田開拓や村内の育英小学校への援助など地域振興に大きく寄与した人物であった。現在、「守田蓑洲旧居」は行橋市指定文化財（史跡）となっている。

末松謙澄（ジャーナリスト・政治家）

豊前前田村の大庄屋に生まれる。仏山に学んだ後、上京して東京日日新聞に入社した。多才多能の巨人と評されたように、その後も通信大臣や内務大臣等を歴任。その他、維新資料「防長回天史」の編纂やケンブリッジ大学在学中に「源氏物語」を最初に英訳した人物でもあった。

吉田学軒（漢学者・官僚）

学軒は仏山とその後継者である静窓の薫陶を受けた。その後は米国学留学を経験し、堤正勝や咸宜園出身の谷口藍田にも学んだ。森鷗外とは親交があり、「鷗外日記」の代筆も行ったことがある。昭和の元号の創案者でもあった。

《豊前》

< 福岡県 >

蔵春園【漢学】
文政7年開業
上毛郡 薬師寺村
恒遠醒窓・精斎

小野原塾【漢学】
文久3年～
(明治2年再興)
築上郡 八田村
小野原善言

有朋園【漢学】
時期不明
仲津郡 彦徳村
吉雄敦

《筑後》

< 福岡県 >

(塾名不詳)【漢学】
維新前より
久留米 榑原町
榑島小助・哲蔵

(塾名不詳)【漢学】
時期不明
久留米 東久留米
梅野七郎(謙斎)

弘道館【漢学】
慶応4年～明治3年
竹野郡 田主丸町
(設立) 石井南橋
(教授) 倉富篤堂

江浦塾【漢学】
文久元年開業
三池郡 江浦村
中野南強

寛秀亭【漢学】
文久2年～明治6年
三潞郡 川口村
坂井克己

春水館【?】
弘化4年～安政5年
宮本村
築山文哉

(塾名不詳)【漢学】
時期不明
生葉郡 隈上村
玉井養純(忠田)

吉富塾【漢学】
文久年間～慶応年間
竹野郡 田主丸中町
吉富亀治郎

簡林義塾【漢学】
明治23年～
明治25年
竹野郡 西郷
吉富復軒

菁莪堂【漢学・医学】
万延年間～明治
生葉郡 山春村
米谷春里

養成堂【漢学】
明治初年開業
上妻郡 水田村
石田晩翠

(塾名不詳)【漢学】
天保年間～
吉井
菊竹磯八

柳園塾【漢学】
文政10年～
明治18年
御井郡 日比生村
井上知愚・昆江

井上昆江
井上知愚

(塾名不詳)【漢学】
時期不明
竹野郡 水分村植木
岩永春斎・寛斎

(塾名不詳)【漢学】
時期不明
久留米 日吉町
後藤謙(東庵)

(塾名不詳)【国学】
時期不明
生葉郡 山春村
熊懐舟山・穆堂

(塾名不詳)【漢学・医学】
時期不明
上妻郡 下広川村当条
石橋猷庵

(塾名不詳)【漢学・国学】
天保又は弘化年間～
吉井
安元蘆湾

修文館【漢学】
嘉永元年～明治18年
上妻郡 木屋村
木屋徳令

(塾名不詳)【漢学】
文政7年より数年間
三潞郡 蒲池村
重富健助(=北原揚水)

自修館【漢学】
安政6年～明治6年
上妻郡 北田村
北原揚水

三楽学舎【漢学】
嘉永5年開業
三潞郡 蒲池村
北原範一(父は揚水)

観古堂【漢学】
文政10年～明治5年
柳河 宮永町
山田彦四郎・仙二

攸好堂【漢学】
安政末年～元治元年
竹野郡 徳重村
倉富篤堂

嚶鳴館【漢学】
文政7年～嘉永7年
竹野郡 田主丸東町
重富鼎

三潞吟社【漢学】
明治20年～大正3年
三潞郡 城島町
星野一郎

(塾名不詳)【漢学】
明治初年開業
竹野郡 隈
石橋六郎

(塾名不詳)【漢学】
明治4年～明治6年
竹野郡 田主丸横町
三原頭蔵

学思館【?】
明治11年～明治26年
生葉郡 大石村
玉井養純の門弟有志

有万家塾【漢学】
明治18年～明治36年
上妻郡 中広川村川瀬
蒲池石言

随宜園【漢学】
明治初年～
明治13・14年
御原郡 立石村松崎
三好定慶

(塾名不詳)【漢学・国学】
時期不明
竹野郡 恵利村
後藤筑水

竹軒義塾【漢学】
弘化3年～明治14年
国分
中山泰橋

一貫堂【漢学】
明治4年～明治6年
上妻郡 福島
後藤貞蔵

咸宜園の影響を受けた私塾

《筑前》

< 福岡県 >

亦楽舎【漢学】
時期不明
中島村
秋重梅庵

梅西舎【漢学】
時期不明
夜須郡 甘木
佐野文河
(文堂、甘城)

凡例
↓ 師弟関係

咸宜園門下生が開いた九州の私塾

《豊後》

<大分県>

輔仁堂【漢学・医学】
寛政年間～元治元年
大分市（大分町）
竹内円平（東門）・安真・
淡軒

好古堂【漢学】
安政元年～明治5年
佐伯市（佐伯村）
楠文蔚

学半舎【漢・国・兵・医】
嘉永2年～明治5年
玖珠町（森藩・森村）
園田朝雲（鷹巣）
（実弟は有田塾の園田鷹城）

有田塾【漢学】
明治5年～明治8年
日田市（有田村）
園田鷹城（実兄は園田鷹巣）

**発蒙寮
【漢・国・詩・筆】**
時期不明
日田市（小寒水村）
園田謙吾（鷹城）

（塾名不詳）【?】
時期不明
竹田市
田能村如仙
（田能村竹田の子）

（塾名不詳）【漢学】
時期不明
玖珠町 大隈
秋吉崎太郎（樽陰）

（塾名不詳）【漢学】
天保8年～天保13年
大分市（大分町）
吉田敬蔵

学而館【漢学】
嘉永4年開業
玖珠町
穴井祝次

石園学舎【漢学】
文久2年開業
玖珠町（小田村）
穴井祝次（孔萊蔵、珠溪）

三隈義塾【漢学】
明治9年開業
日田市（月隈山麓陣屋跡）
諫山救郎
（咸宜園9代目塾主）

新塾【漢学】
時期不明
津久見市（津久見村）
渡辺春洞

（塾名不詳）【漢学】
時期不明
佐伯市（向島）
中島益多（子玉）

緑瀟園【漢学・習字】
天保末年開業
大分市 荷揚町
阿部六郎（淡斎）

大波塾【漢学・習字】
嘉永2年～安政6年
大分市（荷揚町）
大波周策（麟村）

三亦舎・対岳楼【漢学】
文久3年～明治10年
別府市（南石垣村）
矢田梅洞（希一）

学思館【漢学】
明治13年開業
日田市（田島村）
村上姑南
（咸宜園7代目塾主）

（塾名不詳）【漢学】
時期不明
佐伯市（向島）
高妻廉平（芳洲）

瀦澗舎【?】
時期不明
日田市大鷗（中島村）
井上簡（政治家井上準之助
の養父）

涵養学舎【漢学】
弘化元年～
西国東郡草地村
鷲海量容

《豊前》

<大分県>

学館【漢学】
嘉永2年～万延元年
宇佐市（南宇佐村）
吉成図書

信昌寮【?】
天保9年開業
中津市（中摩村）
松島善讓

培養舎【漢学】
文久3年開業
中津市（永添村）
横井寿一郎（古城 忠直）

養翼園【漢学・医学】
明治元年～明治13年
中津市（中摩村）
村上慎次（姑南）
（学思館と同一塾主）

青藍館【漢学・詩】
時期不明
中津市（跡田村）
大江忠庵（田淵元亨）
（塾主は中津藩医官）

山川塾【漢学】
時期不明
中津藩
山川康林（敬蔵）

《肥前》

<佐賀県>

賀山書院【漢学・筆道】
嘉永2年～慶応3年
宮野村
谷口中秋（藍田）

困学寮【漢学】
→**鳳鳴書院【漢学】**
安政4年～
佐世保市針尾中町
楠本端山・碩水

<長崎県>

桜齋書院【漢学】
文久3年～
平戸市石川町
楠本碩水

柿陰古屋【漢学】
時期不明
長崎市江戸町
山本清太郎（晴海）

《日向》

<宮崎県>

**（塾名なし）
【漢学・筆】**
嘉永5年～明治15年
延岡藩 岡富村
山村廉平（綱一郎）

【凡例】

塾名【教科名】
開業年
所在地
塾主名

〈筑後〉「修文館」 木屋徳令（二八〇三〜一八九二）

藐姑射徳令は、筑後国上妻郡木屋村の出身で、幼名は満江、号は石門。後に木屋姓に復した。文政五年（一八二二）二〇



歳のときに兄徳溟と共に咸宜園に入門した。塾では成績最上位で塾長を務めた。咸宜園の大帰（卒業）後は、京師に上り高倉学寮では香樹院や雲華院大舎に師事した。淡窓とのエピソードも多く、嘉永元年（一八四八）に帰郷し、光善寺住職第十三世となり寺院の側に私塾「修文館」を開設した。咸宜園の学風と仏教の教義を基とした慈愛、道義を中心とし、知と徳の一致を目的として子弟を指導した。明治一八年の閉塾までに学んだ門下生の数は約三千名とされており、塾内には「富有」、「綴花」、「晩山」と称する三つの寮を備えた筑後地方を代表する私塾であった。現在も塾則や門下生に関する史料が残り、近年、四六九名の門下生についてその名前や出身地、職業などの詳細が明らかにされた。地域の教育振興や農事関連でも活躍したが、特に玉露緑茶の製法を京都で学び地域に奨励したことが知られ、茶業の改良発展に大いに貢献した。「八女聖人」とも呼ばれた。明治二五年に九〇歳で逝去。



徳令が所蔵した淡窓の肖像

〈肥前〉「鳳鳴書院」

楠本端山（二八二八〜一八八三）
楠本碩水（二八三三〜一九一六）

端山・碩水は三島中洲により「西海の二程」と評された儒学者であった。二程とは宋の大儒・程明道、程伊川の兄弟のことである。

端山・碩水兄弟は、平戸藩の郷土・楠本忠次右エ門の子で、平戸領針尾島で生まれ、好学の士であった父の影響を受けて、早くから学問を修めた。端山は弘化五年（一八四八）二二歳、碩水は佐々謙三郎の名で嘉永元年（一八四八）一七歳で咸宜園に入門したが、兩人共に極めて短期間の遊学であった。その後、碩水は咸宜園に幾度となく淡窓を訪れている。また二人は佐藤一斎や月田蒙斎にも師事した。兄弟は平戸藩の藩校「維新館」で教授し、藩主の漢学講師も勤めた。碩水は明治に入ると針尾に帰郷して私塾を開き、明治一四年には平戸から帰ってきた端山と一緒に「鳳鳴書院」を創め、門下生の数は四百名を超えた。現在、書院の建物は無いが、「楠本端山旧宅及び楠本家墓地土墳群」（長崎県史跡）として旧宅等が保存されている。



楠本端山旧宅



鳳鳴書院

〈肥前〉「鳴滝塾」 シーボルト（二七九六〜一八六〇）

東インド政府の医師募集をきっかけにオランダ商館医として来日。医学者であると同時に臨床医として幅広くこなす知識



と技術は評判となり、出島の外での診療や医学教育も特別に許可された。文政七年（一八二四）、和蘭陀シーボルト塾（鳴滝塾）を開いたがシーボルト事件により国外追放処分となる。開塾から文政一一年までの約四年の間に塾生五〇人以上を教授し、日本の医学の進歩に貢献した。講義は臨床医学教育を中心とし、植物学や動物学なども行われた。実証的な授業であったため、従来のテキスト重視の講義ではなく、蘭方医学を学ぶ者にとっては貴重な存在であった。また、塾生一人一人に課題研究が与えられていたことも特徴の一つであり、優秀な塾生は寄宿生としてシーボルトの講義、診療、研究の補佐を務めることができた。門下生には蘭学者の高野長英や塾頭の岡研介など咸宜園出身者がいるほか、淡窓と交流のあった蘭法医の伊藤玄朴などがいる。現在の鳴滝塾の跡地は「シーボルト宅跡」として国の史跡に指定されている。



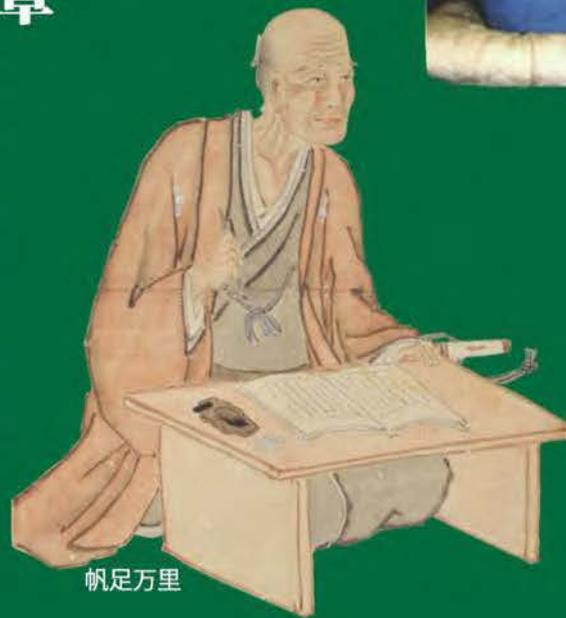
鳴滝塾



村上佛山

第三章

淡窓の交流関係 九州儒学者とのネットワーク



帆足万里



廣瀬淡窓

淡窓の日記やその他の著作には、九州各地の儒学者や詩人などと深く交流していた様子が記録されている。当時の日田は、九州の幕府直轄地支配の中心地として発展し、全国各地の著名な学者や文人たちが日田を訪れている。ここでは淡窓と交流のあった九州を代表する文人たちとその関係性について見ていく。

淡窓の交流関係

淡窓は生来病弱であったため、江戸や京摂など遠方への遊学がかなわず、当時の儒学者としては珍しく、数えるほどしか旅に出ていない。本州へは下関（山口県）を訪問しただけで、その他は北部九州に限られていた。しかしながら、淡窓の著書「淡窓日記」や自叙伝「懐旧樓筆記」には著名な学者や漢詩人との交流を見ることができ、

主な人物では、直接会うことはなかったが備後の菅茶山には詩作の指導を受けており、頼山陽や美濃の梁川星巖は咸宜園に淡窓を訪問した。その他、大坂の篠崎小竹には詩集『遠思樓詩鈔』の序を書いてもらうなど、その他書簡での交流などが活発であったと考えられる。ここで「懐旧樓筆記」から先述の梁川星巖に関する記述を紹介し、次に九州の儒学者との交流について触れることにする。

梁川星巖（「懐旧樓筆記」巻二十三）

「文政七年甲申。余歳四十三。（中略）九月二十日。美濃人梁川詩禪來訪セリ。今年三十六。世上二於テ。詩人ノ聞エアリ。妻ヲ携ヘ來ル。是モ文字ヲ知り書ヲ善クス。但シ旅宿ニ止メ置キ。我家ニハ携ヘ來ラサリシナリ。詩禪東歸ノ後。名譽愈振ヒ。詩集數編ヲ上木シ。又文政十七家。天保三十六家等ノ書ヲ撰シテ。世ニ傳ヘタリ。（後略）」

淡窓と田能村竹田

田能村竹田（一七七七・一八三五）は豊後国直入郡出身の文人画家として著名な人物である。淡窓も直接会ったことがあり、その子如仙（太一又は太乙）は咸宜園で五年間学んでいる。帰郷してからは岡藩の藩校「由学館」で教授するなどして活躍した。

ここでは田能村竹田に関する記述を「懐旧樓筆記」（巻二十四）から紹介する。

「文政八年乙酉。予年四十有四。（中略）二月二十五日。田能郵行藏來り訪ヘリ。行藏ハ竹田先生ト號ス。書ヲ善クシ。詩文ニ長シ。當今第一風流ノ宗匠ナリ。其子太一予カ門ニ入りタル故。數度予家ニ往來セリ。（後略）」

「懐旧樓筆記」（巻三十五）

天保六年（一八三五）九月二十五日条
「二十五日。田能村竹田力歿スルヲ聞ケリ。竹田昔年往來セシコトハ。前二記セリ。浪華ニ遊ヒ。彼地ニテ歿セリ。壽ハ五十九ト力聞ケリ。未タ審カナラス。此人上國ニ於テ。極メテ高名ナリ。天保十七家絶句ニ。其詩ヲ出セリ。後來書名甚タ盛ナリ。片紙寸錦ト雖モ。其價頗貴シ。頼子成相結ヒ。互ニ聲援ヲナセリ。是ヲ以テ名譽傳播スルコト速ナリ。二子相繼イテ歿ス。皆六十二満タズ。惜哉。」

淡窓と草場佩川の交流

草場佩川は肥前多久の儒学者である。多久の邑校「東原庠舎」で学んだ草場佩川は、二十代半ばにして朝鮮通信使の応接に関わり、その詩文は書画は通信使たちから絶賛された。後に佐賀藩校「弘道館」の教授として後進の指導にあたり、また文人としても活躍した。淡窓とは二十年にわたる書簡でのやり取りを経て、初めて会ったことが淡窓の著書に触れているので紹介する。

「懐旧樓筆記」（巻四十五）

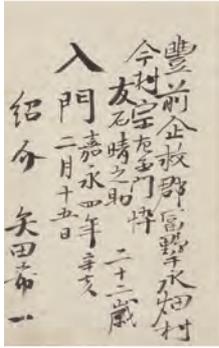
「天保十三年。歳在壬寅。予年六十一。（中略）（九月）五日。（中略）佐嘉二達ス。巒三郎來迎ヘタリ。及佩川ノ弟子富岡左次郎同シク來レリ。導イテ一家ノ樓上ニ至リ。休ハシム。佩川來リ見エタリ。佩川姓ハ草場名ハ韡。字ハ棣芳通稱ハ瑳助。佩川ハ其號ナリ。予ヨリ少キコト五歳ナリ。初ハ多久ノ家臣ナリ。近來擢テラレテ佐嘉侯ノ儒臣ト爲ル。予是ト書信往復スルコト二十年。今初メテ相見ス。（後略）」



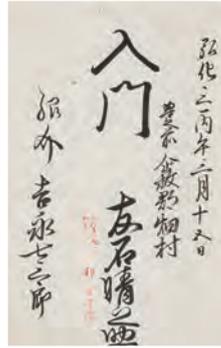
「懐旧樓筆記」巻 45

友石晴之助と『佛山堂詩鈔』

咸宜園と水哉園を両塾で学んだ豊前国企救郡出身の門下生に友石子徳（通称晴之助）という人物がいる。先に入門したのは村上佛山の塾であった。佛山は弘化三年（一八四六）に自ら作詩した漢詩で詩集を編纂することを思い立ち、門弟の友石と里見文恪に作業を手伝わせた結果、嘉永三年（二八五〇）一〇月には詩稿は完成していた。翌年二月に友石は廣瀬淡窓の咸宜園に入門する。その後、間もなくして『佛山堂詩鈔』の詩稿の評と序を淡窓に急ぎ依頼している。友石らの努力の甲斐もあって、嘉永五年一〇月に初版の第一編が水哉園に届いた。その後は、佛山の日記に咸宜園で詩鈔が教材として使用されていることを始め、友石の記述は双方の日記に見られる。



友石晴之助の入門簿



右：水哉園、左：咸宜園



『佛山堂日記』(嘉永6年1月)



『淡窓日記』(嘉永6年3月)



『佛山堂日記』嘉永6年9月26日の条、日田の長野氏から受けた書簡で昨年出版した『佛山堂詩鈔』が咸宜園の講義で使用されていることを知った。



『佛山堂詩鈔』は、嘉永5年(1852)10月に完成したとされ、冒頭の首は廣瀬淡窓が書いている。写真中央の「題佛山堂詩鈔首」がそれである。

幕末漢詩壇での咸宜園出身者の活躍

今回の展示では、幕末に出版された『安政三十二家絶句』と『文久二十六家絶句』の二つの詩集を出品しました。当時の儒学者は基礎的学問である漢学を学ぶと同時に、社会的教養としての漢詩をたしなみとすることが通例でした。よって、著名な儒学者は、同時に漢詩人としても名高いとされてきました。そこで二つの詩集に掲載された人物を概観すると、安政の絶句集では、**淡窓**・**星巖**・**石秋**・**拙堂**・**弘庵**・**溪琴**・**小山**・**磐溪**・**秋里**・**旭莊**・**竹外**・**黄石**・**佛山**・**訥堂**・**江城**・**陶呼**・**湖山**・**枕山**・**舟山**・**青村**・**春涛**・**支峰**・**松塘**・**冷窓**・**毅堂**・**三樹**・**鐵兜**・**誠軒**・**松島**・**梅癡**・**天章**・**清狂**、附録に**雲嶺**・**梅隱**・**天江**・**静呼**の計三六名中、咸宜園出身者は**淡窓**を含めて五名、また文久の絶句集では、**佩川**・**雙石**・**雲嶺**・**石秋**・**松陰**・**拙堂**・**盤溪**・**旭莊**・**竹外**・**韜庵**・**佛山**・**鶴汀**・**雲如**・**柳東**・**枕山**・**春涛**・**淡水**・**静逸**・**松塘**・**毅堂**・**春帆**・**秀野**・**栗園**・**秋村**・**古溪**・**五岳**の計二六名中に四名の咸宜園門下生が含まれています。全国から選抜された作品集の中で、咸宜園の存在はひときわ光を放っています。





俳人
松尾芭蕉
江戸前・中期の俳人
俳諧史上最大の人物

芭蕉の影響

交流 俳人
大島夢太
江戸中・後期の俳人
通称、曾中庵夢太
「芭蕉句解」を著す



福岡藩校甘棠館学長、亀井塾塾長
淡窓(16才)が福岡の亀井塾に入門

師



儒学者
松下筑陰(西洋)
淡窓(10才)に漢詩を教える

医師
倉重湊
淡窓(24才)に教育者の道を勧める

公



天保年間、淡窓や旭庄の塾政に干渉



天保の改革などの政治改革を行う
淡窓(16才)に「字帯刀」を許す



日田代官 羽倉権九郎の子
納戸職兼勘定吟味役
咸宜園に学ぶ



勘定奉行 日田出身
淡窓(73才)と肥前田代で会見



文人との交流



淡窓(20才)を訪ねる



淡窓(27才)が詩の評を請う



咸宜園に淡窓(37才)を訪ねる



淡窓(43才)を訪ねる



淡窓(44才)を訪ねる
息子の如仙は咸宜園で学ぶ



日田で淡窓(60才)と会見



淡窓(61才)を訪ねる



淡窓の「進思楼詩鈔」の序文を書く

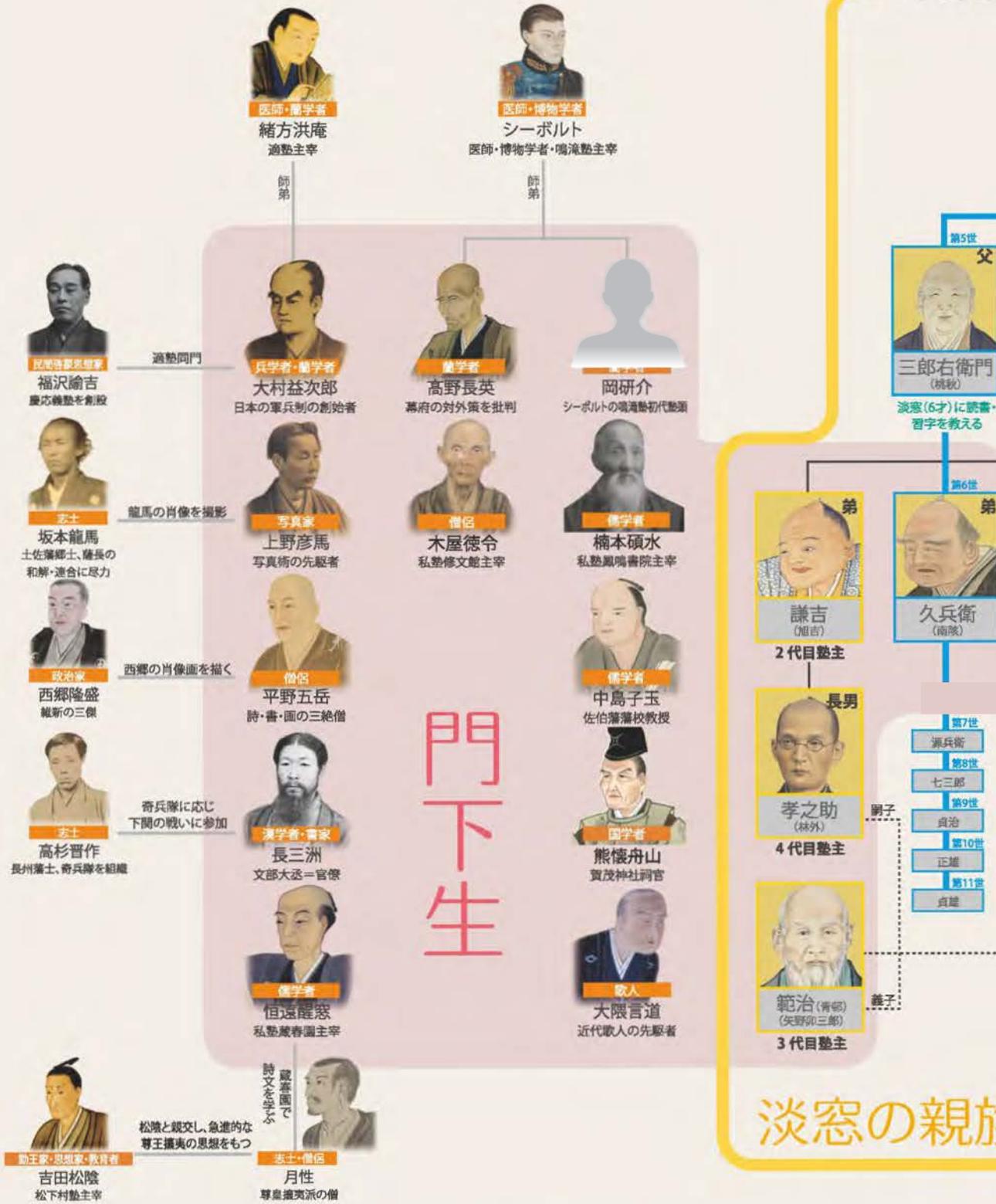


淡窓が「佛山堂詩鈔」の序文を書く

交流

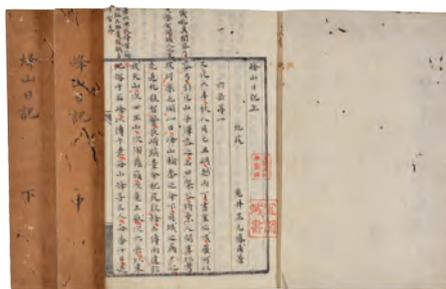
廣瀬淡窓人物相関図

日田廣瀬家(博多屋)



写真提供：大阪市史編纂所・高野長英記念館・山口市歴史民俗資料館・専念寺・長崎歴史文化博物館・適塾記念会・大阪大学適塾記念センター
 公益財団法人 福澤旧邸保存会・高知県立坂本龍馬記念館・萩博物館・松陰神社・月性展示館(僧月性顕彰会)・東京国立博物館
 首都大学東京図書館情報センター・東京大学史料編纂所・竹田市立歴史資料館・公益財団法人 亀岡文庫・華厳寺繁川屋敷記念館
 広島県立歴史博物館・松月院・うきは市教育委員会・個人

1 亀井昭陽「烽山日記」



亀井昭陽は江戸時代後期の儒学者で、福岡藩の藩儒として活躍した。廣瀬淡窓を始めとして、咸宜園出身の廣瀬旭莊や中島子玉などが師事した。烽山日記は文化六年（一八一〇）に藩の烽火番として警備の任に付いていた時に記した日記。史料はその写本（咸宜園蔵書）で、廣瀬林外の日記にも独看したとの記載が見え、漢文の教本としたのであろうか。

3 月日録



安政三年（一八五六）四月に始まる月日録である。四月時点で在席する塾生全てが等級別に記されている。次の五月からは昇給者（四四名）の名前だけ記されるようになった。同年八月からは米価と塾生の飯料が記載されるようになり、塾の運営上、米価の変動には敏感であったことがわかる。その後、万延元年正月までの記録が収まる。

5 咸宜園告諭



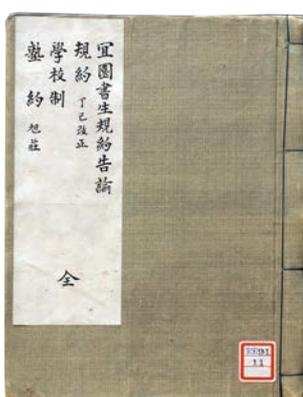
淡窓が天保一二年（一八四二）咸宜園に入門した麻生綱次郎に口述筆記させたものと思われる。末尾に記録した日と思われる閏五月の記載があり、綱次郎の入門以降で最初に来る閏五月は弘化三年（一八四六）となるがその時のものであるか。綱次郎の父は淡窓の門下生・麻生伊織である。

2 咸宜園月日評



月日評とは咸宜園教育の最大の特徴でもある成績表のことである。この史料は淡窓が塾主を務めていた嘉永元年（一八四八）六月のもので、計二二五名の門下生の名前が記されている。その他、慶応二年（二八六六）、明治四年（一八七二）のものが現存する。

4 宜園書生規約告諭



「宜園書生規約告諭」は現存する規約史料の内、原資料としては最古のもので天保一四年（一八四三）に作成された。告諭とは現在の「生徒心得」のようなものである。史料は表題にある通り、「規約丁巳改正」学校制「塾約旭莊」の他三点が綴じられている。淡窓の定めた規約は三件現存するが、その内、「辛丑改正規則」（天保一二年）は後の写本である。

6 淡窓日記（巻五・巻六）



淡窓日記は淡窓が著した日記類の総称として広く用いているが、展示はその中の「欽斎日曆」（文政一一年（一八三〇））と称される部分である。全四二冊（八二巻）を数え、文化一〇年（一八一三）淡窓三二歳の時より七五歳の安政三年九月までの記録である。淡窓はこの年の一二月に没した。途中、文政九年から一〇年の間は病氣療養のため記述を欠いている。全体は簡潔な漢文で書かれている。

7 懐旧樓筆記(巻五・巻六)



史料は淡窓の自叙伝で全二十八冊(五六巻)に及ぶ。天明二年(一七八二)の誕生から弘化二年(一八四五)までの内容で、淡窓六五歳のときに書き始めた。展示は寛政九年(二七九七)の春正月、淡窓一六歳の時に儒学者の藤左仲と一緒に筑前に向かったことが記され、その後、「亀井の塾」に入った記述がある。初見ではなかったが、南冥や昭陽の印象について、「前略(南冥)先生時二歳五十五容貌奇偉非常ナリ。都テ亀家ノ人ハ皆眼光人ヲ射ルコトヲ覚フ」と記している。

史料は淡窓の自叙伝で全二十八冊(五六巻)に及ぶ。

天明二年(一七八二)の誕生から弘化二年(一八四五)までの内容で、淡窓六五歳のときに書き始めた。

展示は寛政九年(二七九七)の春正月、淡窓一六歳の時に儒学者の藤左仲と一緒に筑前に向かったことが記され、その後、「亀井の塾」に入った記述がある。

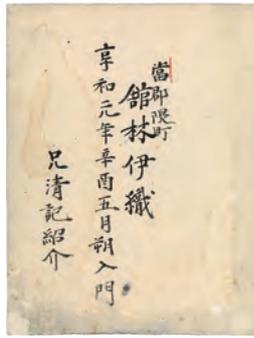
初見ではなかったが、南冥や昭陽の印象について、「前略(南冥)先生時二歳五十五容貌奇偉非常ナリ。都テ亀家ノ人ハ皆眼光人ヲ射ルコトヲ覚フ」と記している。

都テ亀家ノ人ハ皆眼光人ヲ射ルコトヲ覚フ」と記している。

都テ亀家ノ人ハ皆眼光人ヲ射ルコトヲ覚フ」と記している。

都テ亀家ノ人ハ皆眼光人ヲ射ルコトヲ覚フ」と記している。

8 咸宜園入門簿



史料は八四冊に及ぶ咸宜園の入門簿である。記録は享和元年(一八〇二)五月から始まり、明治三〇年(一八九七)六月まで続く。廣瀬淡窓の開塾は文化二年(一八〇五)の長福寺学寮からとされるが、それ以前に教授していた数名の門下生についても入門簿を後に整えた。入門簿記載の最初の門弟は、日田郡隈町の館林伊織である。

史料は八四冊に及ぶ咸宜園の入門簿である。

記録は享和元年(一八〇二)五月から始まり、明治三〇年(一八九七)六月まで続く。

廣瀬淡窓の開塾は文化二年(一八〇五)の長福寺学寮からとされるが、それ以前に教授していた数名の門下生についても入門簿を後に整えた。

入門簿記載の最初の門弟は、日田郡隈町の館林伊織である。

9 明治時代咸宜園絵図(複製)



文化一四年(一八一七)に開塾した咸宜園当時の姿ではないが、塾の全容を描いている。画は豊後国戸次の出身で咸宜園門下生の小栗布岳によるもので、布岳が在籍した頃の記憶をもとにして明治一六年(一八八三)に描いたとされる。画は南西方向から塾全体を俯瞰し、西家部分(塾の左側)の左上には民家を借り受けて学生寮とした「北塾」の建物が見える。全体としては淡窓時代の最盛期を描いたように見えるが、左上部に安政三年に没した淡窓の墓地「長生園」が確認できる。

文化一四年(一八一七)に開塾した咸宜園当時の姿ではないが、塾の全容を描いている。

画は豊後国戸次の出身で咸宜園門下生の小栗布岳によるもので、布岳が在籍した頃の記憶をもとにして明治一六年(一八八三)に描いたとされる。

画は南西方向から塾全体を俯瞰し、西家部分(塾の左側)の左上には民家を借り受けて学生寮とした「北塾」の建物が見える。

全体としては淡窓時代の最盛期を描いたように見えるが、左上部に安政三年に没した淡窓の墓地「長生園」が確認できる。

没した淡窓の墓地「長生園」が確認できる。

没した淡窓の墓地「長生園」が確認できる。

没した淡窓の墓地「長生園」が確認できる。

没した淡窓の墓地「長生園」が確認できる。

10 大正時代咸宜園絵図(複製)



大正二年(一九一三)に淡窓先生頌徳祭が開催されるにあたり、旧門下生たちが集って往時の咸宜園の姿を思い起こし、門下生の長岡永邨(日田出身の画家)により画かれた咸宜園絵図である。大正時代の絵図とは異なり、北側から見た姿となっている。当時はすでに講堂や寄宿舎など主な塾舎は殆ど失われていましたが、江戸時代末期の姿が再現されています。

大正二年(一九一三)に淡窓先生頌徳祭が開催されるにあたり、旧門下生たちが集って往時の咸宜園の姿を思い起こし、門下生の長岡永邨(日田出身の画家)により画かれた咸宜園絵図である。

大正時代の絵図とは異なり、北側から見た姿となっている。

当時はすでに講堂や寄宿舎など主な塾舎は殆ど失われていましたが、江戸時代末期の姿が再現されています。

江戸時代末期の姿が再現されています。

江戸時代末期の姿が再現されています。

江戸時代末期の姿が再現されています。

江戸時代末期の姿が再現されています。

11 蔵春園入門簿



「蔵春園」は文政七年(一八二四)に恒遠醒窓が豊前国上毛郡薬師寺村に開いた塾である。創設時は「自遠館」とした。史料は醒窓とその長子の精齋が塾を経営した時の入門簿で、現在二三冊が残る。親子二代で三千名の門下生を教育したが、現存する入門簿に記載されたその数は四二二名である。

「蔵春園」は文政七年(一八二四)に恒遠醒窓が豊前国上毛郡薬師寺村に開いた塾である。

創設時は「自遠館」とした。史料は醒窓とその長子の精齋が塾を経営した時の入門簿で、現在二三冊が残る。

親子二代で三千名の門下生を教育したが、現存する入門簿に記載されたその数は四二二名である。

現存する入門簿に記載されたその数は四二二名である。

現存する入門簿に記載されたその数は四二二名である。

現存する入門簿に記載されたその数は四二二名である。

現存する入門簿に記載されたその数は四二二名である。

現存する入門簿に記載されたその数は四二二名である。

12 旧点簿



蔵春園で使用された塾生の昇級に関する記録簿である。表紙は一部破損するが、旧点簿と記した下に「上・中」の文字が見える。咸宜園と同様の月旦評が採用されたとするが、この記述からは咸宜園で導入した一級から九級までの九級制(各級二段階で計一八等級)ではなく、上・中・下等の各段階にさらに上中下の三つを設けた全一八等級であることがわかり、この点では同時期の水哉園の成績表と同じである。咸宜園では現在まで旧点簿なる史料の存在は不詳である。

蔵春園で使用された塾生の昇級に関する記録簿である。

表紙は一部破損するが、旧点簿と記した下に「上・中」の文字が見える。

咸宜園と同様の月旦評が採用されたとするが、この記述からは咸宜園で導入した一級から九級までの九級制(各級二段階で計一八等級)で

なく、上・中・下等の各段階にさらに上中下の三つを設けた全一八等級であることがわかり、この点では同時期の水哉園の成績表と同じである。

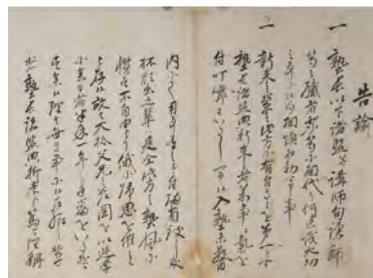
咸宜園では現在まで旧点簿なる史料の存在は不詳である。

現在まで旧点簿なる史料の存在は不詳である。

現在まで旧点簿なる史料の存在は不詳である。

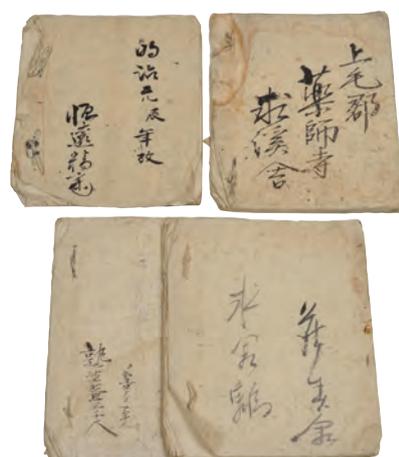
現在まで旧点簿なる史料の存在は不詳である。

13 蔵春園告諭・蔵春園告諭(臨時)



蔵春園の塾生たちに示した「告諭」(写真上)は、今日の「生徒心得」にあたるもので、塾生たちが学園生活を送るうえで守るべきルールが二十二項目にわたって規定されている。また、天保八年(一八三七)の臨時告諭も伝わる。

15 恒遠精齋日記



恒遠精齋の日記は、嘉永五年(一八五二)翌年一月まで、同七年、安政二年(一八五五)は翌年二月まで、安政三年の四冊が残る。安政三年一月に没した淡窓の葬儀に係る記載に詳しく、咸宜園側には記録の無い部分であることから貴重な史料である。

16 恒遠醒窓肖像



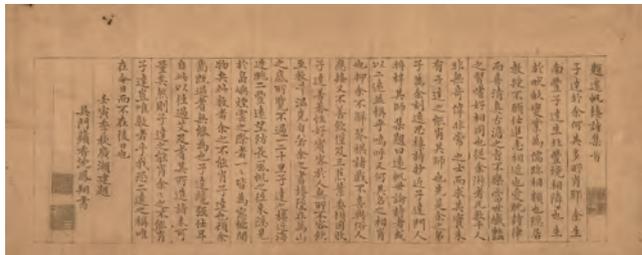
私塾蔵春園を開設した恒遠醒窓の肖像である。漢詩は『遠帆楼詩集』に収載される「示学生之作」で、醒窓の代表的な作である。書は「九月山郵霜露繁、客衣新授有餘温、郷書一読須三拜、内滴慈親老淚痕」とあり、孫の恒遠梅村八五歳の時に書いたもの。

17 孔子像



画は誰によつて描かれたのか定かではないが、恒遠家には円山応挙とも伝わる。賛は筑前の儒学者亀井南冥の筆になるもので、「祖述堯舜、憲章文武、上津天時、下襲水土」とある。講義の時は蔵春園の講堂正面に掲げられた。

18 『遠帆楼詩集』の序



詩集の題名にある「遠帆楼」とは、私塾蔵春園の北の一角にあつた三階建ての建物で、しばしば詩会が開かれていた。楼からの眺めは遠く周防灘に浮かぶ帆船が見えたと伝わる。淡窓は後に自身が咸宜園内に建設した書齋「遠思楼」と詩集『遠思楼詩鈔』の呼称とが醒窓のそれと酷似している。展示は醒窓の詩集に廣瀬淡窓が序文を寄せ、門弟の醒窓をたたえている。

14 恒遠醒窓日記



醒窓の日記は文政九年(一八二六)、天保二年(一八三一)、破損のため記載年不詳の三冊が残る。全て漢文日記には「醒齋漫録」と表題がある。

19 蔵園同社詩集・蔵園同社詩初編



作成年は不詳である

が、「蔵園同社詩集」は一〇名の蔵春園門下生による漢詩集である。表紙の枠外に「落花吟三十首次龍護上人 釈慈謙」と記されるが、詩集の中に人物紹介と作品が収載されている。また「蔵園同社

詩初編（巻之二）」も同様に一四名の蔵春園門下生による作詩集と考えられ、蔵宜園の『宜園百家詩』に類似する。版心に「帆愛堂」とある。

20 蔵春園文机

上段は恒遠醒窓が使用した文机である。材質はケヤキで、重量感がある。直脚には透しがあり、いわゆる天神机の形状を取る。下段の机は蔵春園の門下生が使用した机である。両端に筆返しが付き、一列の引出しを備える。背面には「文久三年癸亥晩春製 三五舎」の墨書銘があるほか、引出しの外底にも塾生名と思われる戸早直蔵の名前と漢詩の墨筆がある。いずれも脚に畳擦りがある。



21 蔵宜園文机



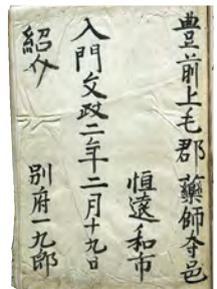
上段は蔵宜園で廣瀬淡窓が使用したと伝わる机で、材質は桐製、量感是非常に軽い。いわゆる天神机である。筆返し無し。脚には畳擦りが有る。仕上げは柿渋とされ、材質は杉である。下段は門下生が使用した机とされ、材質は杉である。両端に筆返しが付き、脚には畳擦りがある。全体を柿渋で仕上げ。明治三〇年（一八九七）蔵宜園閉塾時に収集されたものと伝わる。

22 恒遠醒窓・精斎の印章及び箱

落款（篆刻）印である。一對の大型品は醒窓が使用したとされ、杜甫の漢詩が陰刻され、丙酉年の銘が見える。中型品は引首印である。また一對の小型品は精斎が使用したもの。陽刻で「精斎」の文字が判る。小型品数十個が収まる木製の印章箱も残る。

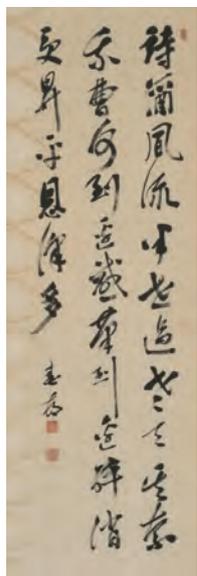


23 蔵宜園入門簿



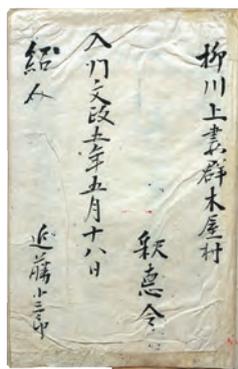
恒遠家からは三人の蔵宜園出身者がいる。最初は恒遠醒窓（入門名は和市中）で文政二年（一八一九）に入門した。紹介者の別府一九郎は、豊前国三毛門手永の大庄屋であった。続いて、文政四年に醒窓の弟運平（のちの西秋谷）が兄の紹介で入門している。成績優秀で塾頭を任され、蔵宜園の十八才子の一人に数えられる。その後は、天保一四年（一八四三）に恒遠次三郎（後の香農）が叔父の醒窓の紹介で入門した。

24 戸早春郵書



戸早春郵は豊前上毛郡の人。戸早謂川の子で、名は亨、字は子元、通称貞吉、後に養澤とした。春郵はその号である。恒遠醒窓の蔵春園で学んだ秀才で、一六歳にして塾頭になった。日田出身の蔵宜園門下生で、三絶僧として名高い平野五岳らと交流があった。春郵は医者として中津で開業するが、詩画を得意として多くの作品を残している。

25 咸宜園入門簿



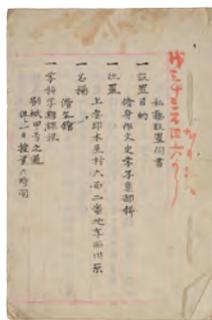
徳令は筑後国柳川上妻郡の出身で、本名は貌姑射(はこや) 徳令、幼名は満江、号を石門とした。文政五年(二八三二)五月に兄徳溟と共に咸宜園に入門した。徳令はその時二〇歳であった。文政十一年(一八二八)には当時在籍する塾生の中で最も上位の成績を修め、塾長も務めていた。天保二年(一八三一)九月に二〇年余りに及ぶ学問を終えて大帰(卒業)した。

26 廣瀨淡窓肖像(複製)



廣瀨淡窓の肖像画である。現存する肖像画の中でも最も若い姿の淡窓(五〇歳前後)を描いた作品とされる。咸宜園門下生であった木屋徳令が天保二年(一八三一)に咸宜園を大帰(卒業)するにあたり、小倉藩絵師の高木豊水に描かせたものである。豊水は豊後日田の出身で、淡窓にも学んだ後、小倉藩の御用絵師となった人物。賛は淡窓の自筆である。

27 私塾設置伺書



光善寺住職第一三世となった。また寺域では私塾「修文館」を開設した。当時の史料には乏しいが、寺伝では明治一八年に閉塾したとされるが、内容は設置の目的、塾の名称、学科学期課程、私塾規則や生徒心得、寄宿舎規則等が記される。史料には明治一八年九月一日付で塾の設置が認可された証の文章と福岡県大書記官の印がある。



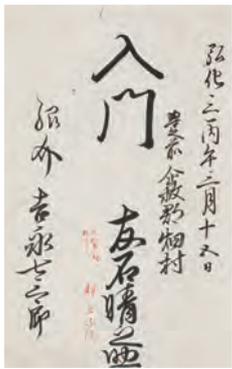
明治一八年七月の作成で私塾設置伺書の写しである。規約には塾内での礼儀、飲食、出入などの記載に始まり、学科目は「修身作文史学子集部学」とし、一日の授業時間は六時間とある。募集生徒は七〇人とし、年齢は一五歳以上としている。徳令の履歴には廣瀨淡窓のもとで学問を修めたことを明記した。

29 佛山堂日記

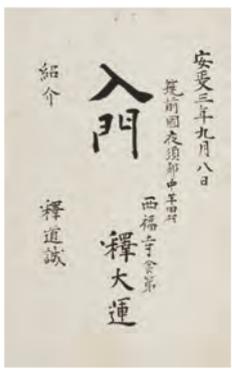


豊前国の儒学者村上佛山が、天保一五年(一八四四)から慶応二年(一八六六)にかけて、家事や地域の行事、塾運営に関する記事などが中心となった日記である。また、佛山の母お民に対する佛山の孝養の行状録でもある。

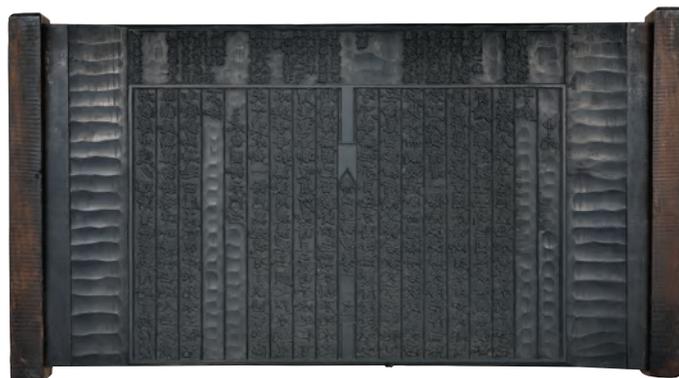
30 入門姓名録



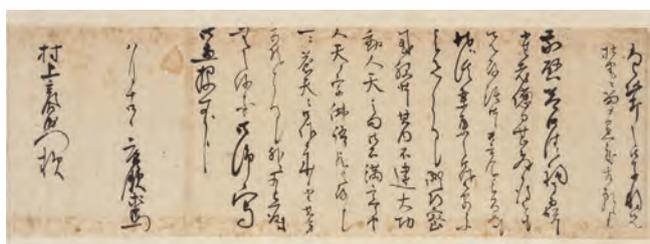
天保五年(一八三四)〜明治一七年(一八八四)までの入門記録で、現存する姓名録に記録された門下生の数は合計一二六三名、豊前からは九一九名と一番多く、次いで長門から九九名、筑前からは九七名が学んでいる。展示は水哉園から咸宜園に遊学した二人の塾生「友石晴之助」と「釈大運」の記録である。



31 佛山堂詩鈔第二編版本



『佛山堂詩鈔』は第一編から同三編まで出版されましたが、現在、佛山堂文庫に保管されるのは第二編の版本五四枚である。左の拡大写真は代表的な詩「水哉園詩示門生」の版本である。



33 佛山堂
貫名海屋の書である。海屋は儒学者、書画家として著名である。佛山は天保元年（一八三〇）、京都の海屋の「須静塾」に立寄り、数ヶ月の間、学んだ。この書は、『佛山堂詩鈔』が完成した嘉永五年（一八五二）に書いたものである。

32 書翰集
書簡集は全九巻から成る。咸宜園と水哉園の関係を示すかのように、廣瀬淡窓や旭莊、青邨、林外と初代から四代目塾主までの往信書簡が残される。その他、淡窓門下の山本晴海、板野誼三（儀造）、柴六郎（秋村）、村上姑南（咸宜園第七代塾主）、帆足杏雨、辛島春帆、西秋谷（恒遠醒窓の実弟）などの名前が見える。

咸宜園門下生・帆足杏雨が画いた水哉園の全景である。杏雨は豊後国大分郡戸次村の出身で、田能村竹田の高弟である。画を竹田に学び、漢学を淡窓や帆足万里に学んだ。幼名は熊太郎のち庸平、諱は遠、字を致大、号は杏雨のほか鶴城・聴秋・半農などを使用した。



34 水哉園南画

35 水哉園文具



村上佛山が愛用した文房具と親交のあつた廣瀬旭莊の遺品である。右上はいずれも石製の硯で、大型品は底面に麒麟の装飾を持つ。また小型のものは木製台座に固定し、表面は蛙の装飾を施した作品である。中央上の作品は陶製の硯屏である。硯屏とは、硯の側に立てて、

ちりやほこりなどを防ぐ小さな衝立とされる。両端部には象の頭部をあしらった突起を持つ。左端は木製の文鎮と伝わる。表には竹の彫刻を施し、「七十八翁范曹」と陰刻される。また、峰には「秋峯戯刀」、裏面にも字が刻まれている。

右下は廣瀬旭莊の遺品を譲り受けた銅製の水牛型水滴（水差し）である。廣瀬家の人物では特に旭莊との交流が深かったことが佛山の日記にも見える。小型品であるが陰刻の細やかさと精巧なつくりは秀逸である。

36 水哉園教具



水哉園で使用された拍子木である。水哉園の講義の際に始業と終業を知らせた大小二組の拍子木と伝わる。大型品には墨書があり、「京都郡稗田村・・・」などの文字が微かに見える。

37 瓢箪



青年時代、各地を遍歴していった。水哉園を開いた頃からは、老母を心配させまいと遠出の旅行は控えるようになりましたが、香春や勝山、中津、馬ヶ岳や英彦山など近隣の山々には母や塾生をともなつてしばしば訪れています。その時には、瓢箪や小瓶に入れたお酒もお供させていたようです。佛山堂日記にも度々、記されています。

38 長仰遺風



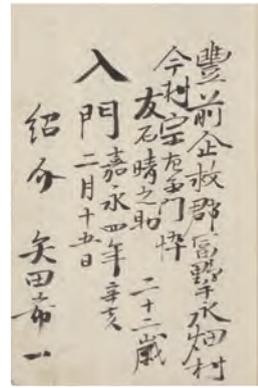
扁額は、村上佛山の死後、先生の教えを守ることを誓った門下生の末松謙澄の筆によるもの。書は、右より「長仰遺風」、縦に「奉題佛山先生遺迹」、号は謙とした。謙澄は、水哉園で学んだ後、東京日日新聞でジャーナリストを務め、明治二十三年（一八九〇）には第一回衆議院議員選挙で当選した。その後も政治家として、伊藤博文内閣を支えた人物であった。

39 水哉園月旦評

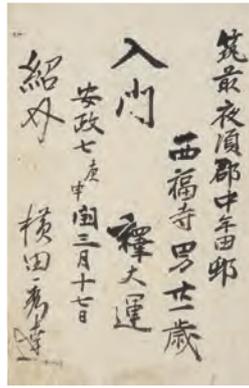


村上佛山が開設した私塾「水哉園」で使用した成績表である。「安政第四十月席序」と表記され、安政四年（一八五七）十月に発表された席序には塾生九六名の名前が確認できる。

40 咸宜園入門簿



友石晴之助は豊前国の出身で、最初は村上佛山の私塾水哉園に入門し学問を修めていたが、その後は豊後日田で私塾咸宜園を開いていた廣瀬淡窓に師事した。咸宜園では成績優秀で九級下まで進んだ上等生である。日田へ遊学した後も、「佛山堂日記」にしばしば登場し、『佛山堂詩鈔』の出版にあたって貢献した人物の一人。



釈大運は筑前夜須郡西福寺の僧侶で、豊前国の村上佛山に漢学を学んだ。その後、安政七年（一八六〇）閏三月一三日の「佛山堂日記」には、日田遊学の相談をした大運について、師・佛山は咸宜園塾主・廣瀬青郵に書簡を作成したことが記録される。大運は、それから四日後に咸宜園に入門した。

41 佛山堂詩鈔



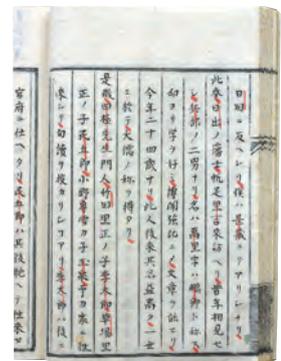
村上佛山の詩集で、嘉永五年（一八五二）に第一編を刊行した。首文は廣瀬淡窓、序は篠崎小竹、評には貫名海屋、梁川星巖、草場佩川、池内陶所のほか、淡窓の末弟・廣瀬旭莊等の名が見える。その後、第二編を明治三年（一八七〇）、第三編を明治八年に出版した。第四編は草稿本が残っている。

42 帆足万里肖像



豊後国日出藩の儒学者で帆足万里の肖像である。三浦梅園や脇愚山、亀井南冥などに師事した後、日出藩内で家塾「稽古堂」を開き、藩士の教育などに従事した。また家老として藩財政の立て直しにも尽力している。晩年は隠棲して、私塾「西庵精舎」を開設し、地域だけでなく、各地から塾生を集めて教授した。万里は、三浦梅園や廣瀬淡窓と併せて「豊後の三賢」と称される。寛政一三年（一八〇一）、日田を訪ねた折に淡窓とも面会した。

43 懐旧樓筆記（卷之九）



帆足万里と廣瀬淡窓が咸宜園において初めて面会した時のことを記録したものの。淡窓は二〇歳、万里は二四歳であった。淡窓はその後の万里の活躍ぶりを「（前略）此人。後來其名益高ク。一世二於テ。大儒ノ称ヲ得タリ。」と説明している。

44 窮理通



万里の代表的な著作が「窮理通」である。西洋の自然科学に通じた科学書と位置づけられるが、著述するにあたっては複数の蘭語の科学書を参考にすると伝えられる。完成は天保七年（一八三六）。稿本は自らが主宰する私塾「西庵精舎」でも使用された。他著には『肄業餘稿』があるが、「肄業」とは「手習い」という意で、文章の勉強のために著したとされる。

45 西庵精舎図



帆足万里の門下生で、本草学者の賀来飛霞が描いた図である。私塾「西庵精舎」は、日出藩の帆足万里が天保一三年（一八四二）に藩務を持して隠棲した地、速見郡南端村目苅に塾を開いた。「西庵」とは、「西方の日の没する山」の意とされる。現地は、絵図に画かれた建物は全て失われているが、土地の形状にその痕跡を見ることが出来る。また、塾の跡地には明治四五年（一九一三）に「西庵精舎碑」が建立された。この図以外に、万里の門下生・麻生貞樹が明治四三年頃に賀来飛霞の画を模写したとされる西庵精舎図（掛軸）もある。

46 草場佩川書



草場佩川は、肥前国多久藩の儒学者で、邑校「東原庠舎（学寮）や「東原精舎」とも」の最後の教授であった。幕末肥前を代表する漢詩人でもあり、淡窓とも交流が深かった人物。作品は竹の図であるが、箱書きには「佩川船山仙崖墨竹図」と題し、裏書には「大正乙丑秋日 悦堂居士観」とある。悦堂とは咸宜園門下生の高取悦堂のことで、廣瀬家所蔵の史料群を調査した際に書いたものである。同時に保管される作品には、佩川の子船山の「草場船山竹之図」、仙崖和尚の「仙崖風竹図」の三部作が一同に箱に収まる。

47 懐旧樓筆記（巻之四十五）



廣瀬淡窓の自叙伝「懐旧樓筆記」には草場佩川と初めて肥前佐賀で会ったことが記録されている。天保一三年（一八四二）、淡窓六一歳の時であった。それまで書簡での交流が二〇年ほど有ったことにも触れている。

48 佩川詩鈔



草場佩川は、儒学者で漢詩人、画家としても才能を発揮した。一三歳から始めた作詩は、生涯で二万余首と謂われるほど、膨大な漢詩を残している。嘉永六年（一八五三）、佩川六三歳の時に、息子の船山と西山兄弟が編纂した『佩川詩鈔』四巻が刊行された。詩鈔には六百余首が収載され、巻之一の巻頭序文には篠崎小竹と後藤松陰が、また巻之四の跋文には廣瀬淡窓とその末弟の旭莊の文が掲載されている。

49 安政三十二家絶句



全三巻。廣瀬淡窓を筆頭に梁川星巖や斎藤拙堂の名が並び、九州では村上佛山や草場船山など三二名の詩人と附録の四名の計三六名が掲載されている。咸宜園出身者では廣瀬旭莊や廣瀬青村、劉君鳳（掲載名は石秋）、劉石舟（掲載名は冷窓）などの名前が見えるほか、総計七四九首が収まる。

50 文久二十六家絶句



全三巻。二六名の東西を代表する詩人が掲載される絶句集である。筆頭は肥前の草場佩川である。その他、後藤松陰や大沼沈山など名前が見える。九州では村上佛山や咸宜園出身者の廣瀬旭莊、劉君鳳、柴秋村、平野五岳などが載っており、総計六一八首が収まる。

51 熊懷舟山肖像



国学者・歌人。熊懷家は筑後国生葉郡山北村で代々賀茂神社の祠官を務める。舟山は号で、名は行禮、幼名を兼馬とした。咸宜園には文政二年（二八一九）一五歳で入門し、淡窓に師事した。その後、青柳種磨に国学を学び、二八歳頃に肥前唐津で私塾を開いて門弟を教授したが、父の病報に接して帰郷し、祠官を継いだ。淡窓の末弟旭荘の室は山本郡吉木村合原家の出身、またその子林外の室も本郡山北村の吉瀬家からと、いずれもその媒酌には舟山の存在があったようだ。

52 咸宜園往復荷棒



咸宜園門下生熊懷舟山とその孫穆堂（入門名は生男、通称は武男）の二人が入門時に使用した荷棒である。箱書きには「日田咸宜園遊学往復荷棒 舟山翁一一歳入門ヨリ孫穆堂翁マデ使用」と記される。なお、舟山の入門年齢は正しくは一五歳と思われる。材質は杉である。



廣瀬淡窓肖像



平成25年度咸宜園教育研究センター特別展（秋季企画展） 出品目録一覧

No.	展示資料名	点数	法量	所蔵先	備考	No.	展示資料名	点数	法量	所蔵先	備考
1	亀井昭陽「峰山日記」	3	縦23.6 横15.8	公益財団法人 廣瀬資料館	亀井昭陽 文化六～七年の日記	27	私塾設置伺書	1	縦24.6 横16.9	光善寺	明治十八年作 修文館
2	咸宜園月旦評	1	縦68.5 横64.1	公益財団法人 廣瀬資料館	嘉永元年六月（談窓時代）	28	修文館規約	1	縦24.3 横16.5	光善寺	明治十八年作 修文館
3	月旦録	1	縦24.0 横16.9	公益財団法人 廣瀬資料館	咸宜園（廣瀬林外等の墓） 安政三年四月～万延元年 正月までの記録	29	佛山堂日記	4	①縦23.3 横15.5 ②縦23.8 横17.0 ③縦23.2 横17.6 ④縦23.4 横15.1	佛山堂文庫	①嘉永四年 ②嘉永六年 ③安政七年 ④慶應二年 村上佛山著 福岡県指定有形文化財
4	宜園書生規約告諭	1	縦24.4 横16.8	公益財団法人 廣瀬資料館	咸宜園（談窓時代）	30	入門姓名録	2	①縦30.5 横22.4 ②縦30.3 横22.7	佛山堂文庫	①友石晴之助 ②釈大運 福岡県指定有形文化財
5	咸宜園告諭	1	縦24.4 横16.8	公益財団法人 廣瀬資料館	咸宜園（談窓時代） 孫生綱次郎序	31	佛山堂詩鈔第二編版 木	1	縦21.2 横38.6(総寸法) 縦19.8 横34.9(内版)	佛山堂文庫	福岡県指定有形文化財
6	談窓日記(巻五・六)	1	縦24.3 横16.0	公益財団法人 廣瀬資料館	談窓の日記	32	善翰集	3	縦 19.8 (二巻) 縦 22.1 (三巻) 縦 18.7 (五巻) 軸を含む長さ	佛山堂文庫	第二巻、第三巻、第五巻 福岡県指定有形文化財
7	懐旧樓筆記(巻五・六)	2	縦23.9 横15.7(稿本) 縦22.7 横16.4(浄書)	公益財団法人 廣瀬資料館	談窓の自叙伝	33	佛山堂	1	縦41.0 横106.0	佛山堂文庫	扁額 貫名海屋書 嘉永五年作
8	咸宜園入門簿	1	縦28.8 横20.5	日田市	複製 巻之一(談窓時代)	34	水哉園南面	1	縦164.8 横47.5	佛山堂文庫	掛軸 帆足杏雨画
9	明治時代咸宜園絵図	1	縦42.6 横117.3	日田市	扁額 複製	35	水哉園文具	5	①長23.2 巾13.9 高4.4 ②長13.7 巾7.5 ③縦 横 ④縦 横 ⑤長9.8 巾3.1 高4.6	佛山堂文庫	①硯 ②硯 ③文筆(木製臨筆型) ④陶製硯屏 ⑤銅製水牛型水滴
10	大正時代咸宜園絵図	1	縦17.0 横73.7	日田市	扁額 複製	36	水哉園教具	2	縦17.6 横44.4高4.2(大) 縦11.9 横2.0高2.0(小)	佛山堂文庫	拍子木2対 (大)は墨書有り
11	藤春園入門簿	23	縦30.8 縦22.3～22.8	藤春園	豊前市指定有形文化財	37	瓢箪	1	高20.2 巾12.5	佛山堂文庫	台座付き
12	旧点簿	1	縦24.5 横17.0	藤春園	豊前市指定有形文化財	38	長引遣風	1	縦38.0 横145.0	佛山堂文庫	扁額 末松謙澄書
13	藤春園告諭 藤春園告諭(臨時)	2	①縦 横273.0 ②縦24.5 横18.9	藤春園	①卷子 ②和装本 豊前市指定有形文化財	39	水哉園月旦評	1	縦84.0 横59.1	個人	額装 水哉園の成績表 安政四年十月作
14	恒遠醒窓日記	3	①縦24.8 横17.0 ②縦23.4 横16.5 ③縦23.5 横16.3	藤春園	①天保二年 ②時期不明 ③文政九年 豊前市指定有形文化財	40	咸宜園入門簿	2	①縦27.3 横20.5 ②縦26.5 横20.2	公益財団法人 廣瀬資料館	①友石晴之助 ②釈大運
15	恒遠精舎日記	4	縦24.4～25.0 横16.8	藤春園	豊前市指定有形文化財	41	佛山堂詩鈔	3	縦26.2 横17.8	公益財団法人 廣瀬資料館	村上佛山 嘉永五年刊
16	恒遠醒窓肖像	1	縦108.7 横41.4	藤春園	豊前市指定有形文化財	42	「帆足万里肖像」	1	縦47.8 横32.6	個人	大分県立先哲史料館管理 (寄託資料)
17	孔子像	1	縦85.5 横29.8	藤春園	掛軸 円山応挙画、亀井南冥賛 豊前市指定有形文化財	43	懐旧樓筆記(巻之九)	1	縦22.7 横16.0	公益財団法人 廣瀬資料館	談窓著 帆足万里の記事
18	「遠帆樓詩集」の序	1	縦28.0 横62.5	藤春園	扁額 廣瀬淡窓書 豊前市指定有形文化財	44	窮理通	2	縦33.9 横15.7	公益財団法人 廣瀬資料館	帆足万里著
19	藤園同社詩集 藤春同社詩初編	2	縦24.8 横16.8(詩集) 縦24.7 横17.2(初編)	藤春園	豊前市指定有形文化財	45	西純精舎図	2	縦87.7 横31.4 高8.5	個人	木製箱 賀来飛霞画
20	藤春園文机	2	①高26.5 横85.5 奥行38.9 ②高29.4 横65.3 奥行33.4	藤春園	①恒遠醒窓使用机(樟) ②塾生使用机(杉) 豊前市指定有形文化財	46	草場佩川書	1	縦145.0 横33.6	公益財団法人 廣瀬資料館	掛軸
21	咸宜園文机	2	①高26.2 横110.3 奥行43.4 ②高32.3 横65.0 奥行29.2	日田市	①廣瀬淡窓使用机(桐) ②塾生使用机(杉)	47	懐旧樓筆記(巻之四十五)	1	縦22.7 横16.2	公益財団法人 廣瀬資料館	談窓著 草場佩川の記事
22	恒遠醒窓・精舎 の印章及び箱	6	①高20.5 巾5.9 奥5.8 ②高8.0 巾2.9 奥2.9 ③高18.5 巾5.8 奥2.2 ④高14.5 巾13.0 奥20.0	藤春園	①印章一對(石製) ②印章一對(石製) ③印章(石製) ④印章箱(木製辣仕上)	48	佩川詩鈔	4	縦24.1 横16.4	公益財団法人 廣瀬資料館	草場佩川著 嘉永六年刊
23	咸宜園入門簿	3	①縦27.2 横19.6 ②縦27.4 横19.4 ③縦26.8 横19.9	公益財団法人 廣瀬資料館	①恒遠醒窓 ②西秋谷(醒窓弟 運平) ③恒遠香農	49	安政三十二家絶句	3	縦22.8 横15.5	公益財団法人 廣瀬資料館	頼田正等編 安政四年
24	戸早春郵書	1	縦135.5 横47.3	個人	掛軸 藤春園門下生	50	文久二十六家絶句	3	縦21.9 横15.0	日田市	桜井成憲編 文久二年
25	咸宜園入門簿	1	縦27.2 横18.7	公益財団法人 廣瀬資料館	木屋(家)徳令	51	熊徳舟山肖像	1	縦62.7 横30.4	うきは市	掛軸 近代の作
26	廣瀬淡窓肖像	1	縦35.6 横107.8	日田市	掛軸 複製	52	咸宜園往復荷棒	1	長111.8 高2.5 厚3.3 (高・厚は最大値)	うきは市	木製(杉) 熊徳舟山と孫 の禮堂使用の天秤棒

注：展示資料について、異なる巻の史料名が同一の場合、史料名の前に巻名を付して整えた。
 例示：「咸宜園入門簿」、「藤春園入門簿」
 ・法量の単位はcmである。
 ・扁額及び掛軸などの法量は本紙のみの寸法を記した。
 ・種別及び形態等について特に記載の無い場合は和装本である。

主な参考文献

- 水月哲英編『石門先生』一九三四
倉富了一編著『昆江井上先生』一九三七
日田郡教育会編『増補淡窓全集』一九七一 思文閣出版
岡為造編集『豊前薬師寺村恒遠塾 附精齋学統』一九七六
『亀井南冥昭陽全集』一九七八～一九八〇 葦書房
海原徹『学校』一九七九 東京堂出版
小泉和子『家具と室内意匠の文化史』一九七九 法政大学出版局
『楠本端山とその遺跡』一九八〇 親和銀行
岡田武彦他編『楠本端山碩水全集』一九八〇 葦書房
本田三郎編『楠本端山とその遺跡』一九八〇 親和銀行
R・ルビンジャー(石附実・海原徹訳)『私塾』一九八二 サイマル出版会
海原 徹『近世私塾の研究』一九八三 思文閣出版
井上義巳『福岡県教育史』一九八四 思文閣
外山幹夫『長崎県教育史』一九八四 思文閣
鹿毛基生『大分県教育史』一九八四 思文閣
恒遠俊輔『豊前薬師寺村恒遠塾』一九八四 蔵春園保存会
藤野保編『九州と思想・文化』(九州近世史研究叢書14)一九八五 図書刊行会
浮羽町史編集委員会『浮羽町史』上巻・下巻一九八八 浮羽町
西村天因(孤口治校注)『九州の儒者たち』一九九一 海鳥社
恒遠俊輔『幕末の私塾・蔵春園』一九九二 葦書房
狭間久『帆足万里の世界』一九九三 大分合同新聞社
浦川 辰『儒学者 谷口藍田』一九九三
田本政宏『私塾に於ける学問・教育・帆足万里の西嶋精舎を中心として』『史料館研究紀要』第三号 一九九八 大分県立先哲史料館
東原座倉創設三百年記念『東原座倉と湯島聖堂』一九九九 多久市郷土資料館
『幕末維新期漢学塾の研究』二〇〇三 溪水社
恒遠醒窓生誕二〇〇年記念展『私塾蔵春園とゆかりの人びと』二〇〇三 求菩提資料館
三浦尚司(校註者)『遠帆楼詩鈔前編』(改訂版)二〇〇四 草文書林
三浦尚司(校註者)『遠帆楼詩鈔後編』二〇〇四 草文書林
市川寛明・石川秀和『図説江戸の学び』二〇〇六 河出書房新社
木村政伸『近世地域教育史の研究』二〇〇六 思文閣出版
高橋 敏『江戸の教育力』二〇〇七 筑摩書房
大石 学『江戸の教育力近代日本の知的基盤』二〇〇七 東京学芸大学出版会
平成二一年度特別展『おおいた発! 幕末文化維新! 賀来家・華麗なる一族』
二〇〇九 大分県立歴史博物館
武田耕一『草場佩川・漢詩と絵画を中心として』二〇一〇 行人社
村上良春『幕末の漢詩人・村上佛山について』
『平成二二年度特別展生誕二百年記念「村上佛山」展示図録』二〇一〇
行橋市教育委員会
倉澤昭壽『近世足利学校の歴史』二〇一一 足利市
『近世日本の学問・教育と水戸藩Ⅱ』二〇一一 水戸市
前田 勉『江戸の読書会』二〇一一 平凡社
図説『江戸・幕末の教育力』二〇一三 洋泉社
早船正夫『儒学者亀井南冥・ここが偉かった』二〇一三 花乱社
『廣瀬淡窓と咸宜園・近世日本の教育遺産として』二〇一三 日田市教育委員会
なお、本文中の人物説明には『国史大辞典』一九七九・一九九七(吉川弘文館)や『コンサイス日本人名事典』第五版v二〇〇九(三省堂)などを利用した。

平成二五年度 咸宜園教育研究センター特別展（秋季企画展）
「九州の私塾と教育」咸宜園とその周辺」 展示解説書

発行日 平成二五年一〇月三〇日

編集・発行 日田市教育庁 咸宜園教育研究センター
八七七・〇〇一二

大分県日田市淡窓二・二・一八

電話 〇九七三・二二一・〇二六八番

印刷・製本 尾花印刷有限公司

正 誤 表

頁数	訂正箇所	(誤)	(正)
17頁	写真下 キャプション	林外	廣瀬孝之助(林外)
19頁	豊後の涵養学舎は咸宜園の影響を受けた私塾とするのが正しい		
22頁	下段 本文3行目	その詩文は	その詩文や
23頁	下段 18行目	春帆	春帆
23頁	下段 18行目	秋村	秋村
27頁	中段 10 キャプション	大正時代	明治時代
36頁	No.20と21の法量錯誤	其々の法量を入替	

日都译
朗後親約

于祥坐

舍長副坐

儀業坐

素談坐

洒揖坐

令計以司茶

飲事侍史夜寢

各考定矣

小塾貧生之

所別有舍長

東塾
東樓

遠思搗文稱
西家青村先
生寓此

文三先生

墓碑

柴秋村

之所

書

長生園

北塾

西塾

南塾

南塾
南樓

碑文先生之所自製而
旭莊之所書也

早

世末
云
初

平成25年度 咸宜園教育研究センター特別展（秋季企画展）

九州の私塾と教育く咸宜園とその周辺く

咸宜園教育研究センター

